昭和60年８月１日号（毎月２回１日、15日発行）第28巻・第15号　通巻636号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
15
8.1.



広島被爆40周年

平和を訴える 姉妹都市 ボルゴグラード



二〇〇日の戦闘に耐えぬき、勝利した一九四三年のスターリングラード（現ボルゴグラード）。上の写真は復興した今日のボルゴグラード。

第15号　1985年8月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

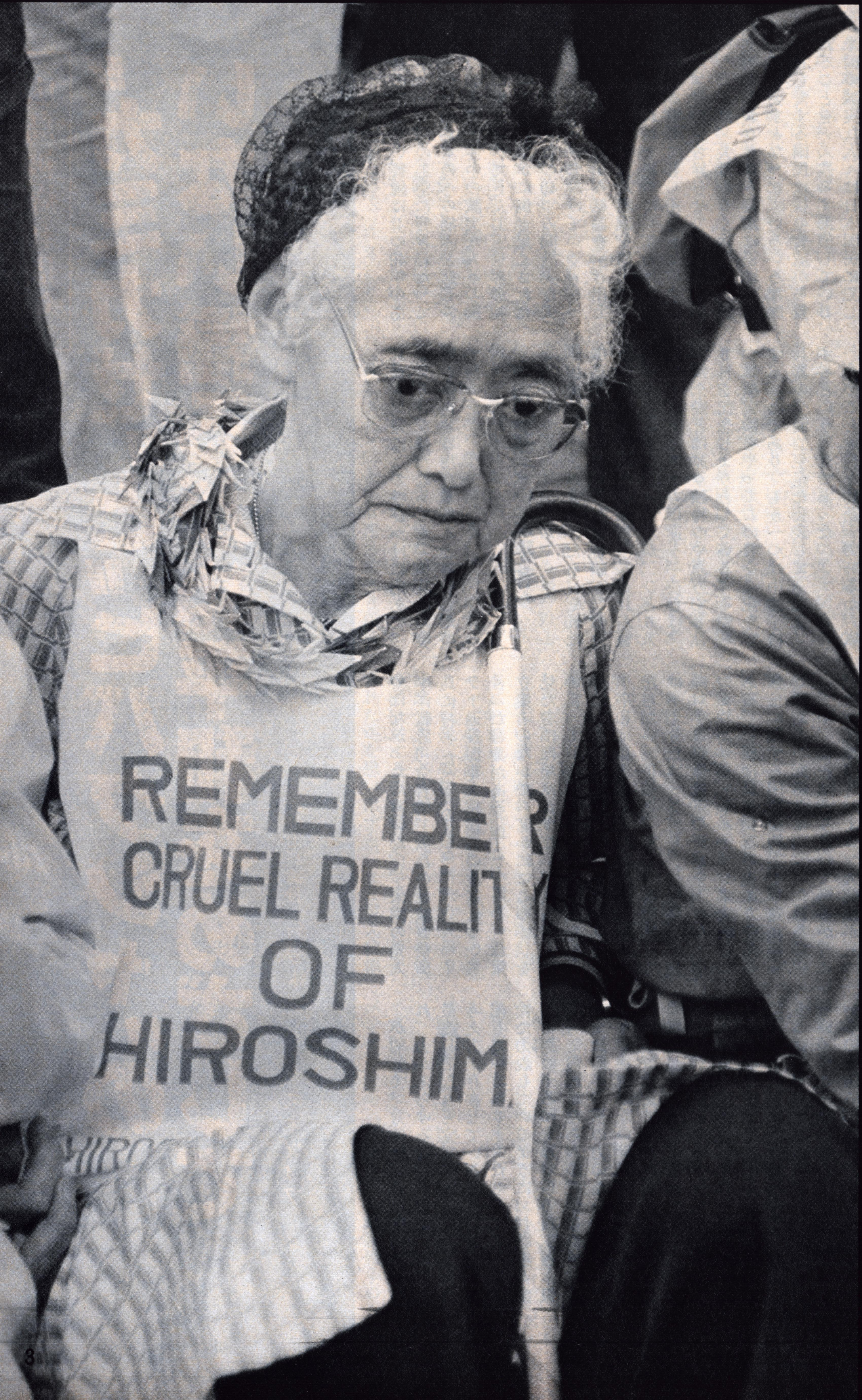


「戦争はいらない！」の手書きのプラカードを持って反戦集会に参加した1975年生まれのナターシャ・ジェビャトキナは、広島の悲劇については大人たちの話でしか知らないが、すべてのソ連国民と同様に戦争や爆弾のない世界を望んでいる。



平和はすべての大陸のすべての人々にとって必要である。平和をめざす闘いは各人の神聖な仕事であり、われわれ地球の明るい未来は平和愛好勢力の団結にかかっている。

広島の悲劇をくり返してはならない！　原爆の恐怖の生き証人であるこの日本婦人の声は、反戦集会で特別な力をもって響き渡った。



広島被爆40周年

〝カミカゼ〟と〝ヒバクシャ〟のいない揺るがぬ平和をめざして

本誌政治評論員　ウラドレン・クズネツォフ

広島の痛ましい警鐘はこの40年のあいだずっと地球の上空に響きわたっている。失われたものへの痛みと悲しみはこの40年間世界中の誠実な人々の胸のなかに燃え続けてきたし、世界最初の原爆の業火のなかに焼き尽くされた人々の死灰は、この40年の間誠実な人の心の戸をノックし続けている。

人類はあの悲劇から結論を引き出した。人類は広島の主な教訓を悟った。それは、これ以上絶対に、この地球上のいかなる場所にも、死をもたらす核のキノコ雲を立ち昇らせてはならないということだ。大量殺りく兵器から現代文明を救おうという要求は正に全世界を覆う要求となった。いろいろな国の平和を愛する国民は核の脅威から救われることを一人残らず渇望している。

米国の誠実な人々は日本国民に犯した自国政府の罪を忘れていない。広島の原爆投下40周年に当たることしこの米国の平和運動家たちから、8月6日を核兵器実験停止の日にしようと呼びかける声が響きわたった。この呼びかけは世界いたる所で評価され、支持された。ソ連はこの呼びかけに応えて、8月6日を待たなくても、核兵器の実験を停止する用意があると声明したのであった。

〝力に基づいた平和〟

核実験の停止がきまったら、それは広島の犠牲者たちの冥福を願うこの上ないはなむけになるだろう。これが世界中の考え方だ。ところが、ひとり米国の支配層の考え方は違う。彼らは、人類全般とは違う独特のやり方で8月6日を記念しようとしている。その一つは核実験をやってこの日を〝記念〟することであり、もう一つは中性子核兵器の全面的生産を公表して〝記念〟するという考えであった。

このことは何を物語っているか。広島と長崎の原爆攻撃を命じた者の後継者たちが、何も理解しなかったし、何事も学びとらなかったことを物語っている。彼らは自分のために何ひとつ結論を引きださなかったし、また何か引きだしたとしても、それは必要な結論ではなかったに違いない。米国の元太平洋艦隊司令官で、広島の壊滅直後広島に行ったことのあるノエル・ヘイラー退役海軍大将がこの政策について言った言葉がある。「こんにち、政策立案者のなかで、じかにここの惨状を見た者ははなはだ少ない。彼らは、口で言っていることが現実にはどんなことになるのか、分かっていない」

「平和は必ず力の上に築かれなければならない。正しさ、善意、善行だけでは不十分だ」。こう言ったのは、広島に対する原爆投下の決定を下した人間、つまりハリー・トルーマン米大統領である。これは原子兵器の生産と使用の禁止に関する国際条約案をソ連が提案したあの一九四六年に言った言葉だ。

では、現在はどう言っているか。ここでロナルド・レーガン大統領が言っている言葉に耳を傾けてみよう。

「力に基づく平和——これは決して口先の宣伝文句ではない。これは生きた事実なのである……」、「力なくしてはどんな効果的な外交も交渉も、また、確実な民主主義も平和もあり得ない」

かくして、力は絶対者に祭り上げられ、力があらゆる存在の根源、宇宙の最高目的なりと宣言される。こういう考え方が存在している限り、米国を支配しているエリートたちが、よく米国内で力説しているように、剣を鍛え直して鋤にするつもりでいるなどと本気で考えられるだろうか。現在のワシントン政府が、核の力のない世界、大量殺りく兵器のない世界など、現在も将来も全く考えていないという点に諸悪の根源があるのだ。すべての考えはそれとは別のことに集中している。どうしたらもっと多く核兵器を蓄積し、核兵器を改善できるか、どうしたらソ連に対する軍事的優位を得られるか、どうしたら宇宙を戦場に変えられるか、といったことばかりに考えが集中しているのである。

戦争論議

いまの米国ほど盛んに核戦争を論議している国はほかにない。

核戦争に対する見方はいろいろある。

核戦争とは、どんなことがあっても未然に防いで、現在の世代や未来の世代が絶対に遭遇しないようにしなければならない大変事であるとみる見方もある。また、どうしても免れられない、人類に対する最も重大な犯罪だと見る見方もある。

しかし、それとは違った言い方がある。核戦争とはありうるもの、許容しうるものであるという言い方だ。政治的目的を達する手段だという言い方だ。いろいろな手段方法に訴え、いろいろな期限を設けて実行し、最後には勝利という結末へ持って行けるまったく現実的な手段だという言い方だ。

無傷で生き残ろうというつもりなのである。核の竜巻のなかで米国がノアの箱舟のように生き残ることを期待しているのである。だからこそ、完全な分別をそなえ、素面でいながら、〝核戦争のあと〟郵便制度をどう運営するかというようなことについて膨大な議会向けの報告書まで作成したのである。

公認の、また非公認の、政治屋の、また軍人の〝タカ派〟ども、または米国内の呼び方によれば、カタストロフィ・ロビーストどもは、競うように、彼らにとって核戦争なんか痛くもかゆくもないなどと断言する。〝水爆の父〟、物理学者のエドワード・テラーは言う——「……大部分の者は生き残り、闘いを続けることができるだろう」。この結論を裏付けるためにこの物理学者は、広島に原爆を投下してから3日後には「すでにこの町の通りを電車が走っていた……」などと、飛んでもないことを引き合いに出している。

ペンタゴンに協力した有名な学者のひとりトーマス・K・ジョーンズは、全面核戦争が終わり米国が灰燼のなかから再び立ち上がるには2年ないし4年かかるという計算をしたことがある。

ホワイトハウスの顧問リチャード・パイプスの言葉——「核戦争は、病気にかかって手術をし、手か足を切断する程度のことで、手術の結果死んでしまうほどのことではない」

連邦緊急管理庁職員のウイリアム・チップマンが、核破局のあと米国の国家制度は生き残るかという質問に答えた言葉——「……結局アリはかならず新しいアリ塚を築くものだ」

ブッシュ米副大統領の言葉——「指揮・管理システムや工業力が生き残る側、一定パーセントの人口をしっかり防御できる側、敵から受ける損害以上の損害を敵に与える手段をもっている側が、勝利者になれる」

口先で核戦争を論じるだけではおさまらず、核戦争を意図したり、〝核戦争ごっこ〟をするようになっているのである。

〝押しボタン〟という注目すべき題名をつけたダニエル・フォードの本が米国でついこのほど出版された。この著者は、ロッキー山脈の真ん中の掩蔽壕に置かれた指揮・管理システムが核戦争の状況下でどう機能するかを、2年にわたって研究し、いろいろな欠陥があるのに驚いたと、そのひとつひとつを説明した上、「その欠陥の多くはペンタゴンも認めている」と述べている。フォードの結論の一つは次のようなものである。一九四五年に原子の世紀が幕をあけて以来、米国の歴代大統領は自分に課せられた責任に応えていない。しかも、〝押しボタンのところにいる人たち〟、自国民のほかに何億もの人々の生死をその手ににぎっている人たちについても同じことが言える、というのである。

ここに、ペンタゴンの一将校が現大統領の〝行動ぶり〟について自分の印象をフォードに語った言葉がある。

「彼の行動は、自動人形か、なにかの全体のなかの一部分みたいなもので、ひとの長たる人物のそれではない。たとえば、レーガンが言う、『さあ、どうすればよいのか。このボタンを押すのかね』。すると、桃色の頬をした大佐かなにかがレーガンに言う、『大統領閣下、7分のうちにこれとあれをなさらなければなりません』」

軍人に教えられて〝自動人形〟のように行動する大統領とは……〝マンハッタン計画〟(原爆製造プロジェクト)以後、戦後の米国の歴代大統領の庇護の下にどれだけの、ソ連とその他の国に対する核攻撃計画が現れ、研究されたかを思い出すと、また現大統領が〝どうしても回避できないアルマゲドン〟(この世の終末の直前に行われるという最終戦争)を再三予告したことを思い出すと、さらにまた、同じ現大統領が言った、ソ連に核攻撃を加えるという〝冗談〟を思い出すと、それこそ気分が悪くなってくる。

それに、「戦争を始めるのは国民ではなくて、政府の仕事だ」という同じ大統領のお好きな言い草もここで思い出さずにはいられない。

〝戦争ごっこ〟をしているあいだに、ありとあらゆる種類の大量殺りく兵器の形をとった戦争の巨大な土台が置かれようとしている。そして、この土台はますます新しい、死をもたらす装置で蔽われようとしている。海上、陸上、空中で戦闘行動を行うための核軍拡競争が宇宙にも移ろうとしている。

思想的・物質的な戦争準備と、実際に押しボタンを押す瞬間との距離はそんなに大きなものではない。米国の専門家リチャード・ハービンの意見によると、わざとか、誤ってか、またはふっと押してしまう可能性は、誤って原子戦争が起こる可能性を一〇〇とすると、毎年5ないし7あるが、これは、ウソの情報もしくは恐怖心に支配されたためか、米国で核政策の決定因子になっている病的なまでの反ソ感情に動かされるためと考えられる。

戦略にもいろいろある

米国筋から分かってきたことだが、ペンタゴンが「ソ連との長期核戦争の遂行」を見越した戦略的指示をつくったのは、まさに上からの指図によるものであった。それ以前も、欧州大陸に限定的、局地的な核戦争が起こりうるし、それを是認できるという考え方とか、やはり欧州の戦場で何か〝実験的な〟または〝警告的な〟核爆発を行うという着想（気違いじみた思いつきという意味の言葉としてだが）とか、いろいろ歪んだ考えの産物が現れたことがある。米国大統領が署名した〝国家

の安全保障に関する指令第32号″のなかには、最初に核兵器を使用することは″当然″であり″高潔な″行為であると、堂々と述べられている。この指令は「(敵の)政治的・軍事的指導部、核兵力、非核兵力、交通・通信網、軍事力を決定する工業部門を確実に撃滅すること」を命じているのである。

結論はどうか。その結論を有名な評論家ジェームズ・レストンがニューヨーク・タイムズ紙の紙上で出している——「わが国は戦争の戦略をもっているが、平和の戦略はもっていない」

ソ連は平和の戦略をもっている。その戦略の眼目は、限定戦争であれ、全面戦争であれ、短期戦であれ、長期戦争であれ、小さな戦争であれ、大戦争であれ、核戦争は一切しない、ということだ。国際紛争を解決する手段となるような戦争は一切しない、ということだ、M・S・ゴルバチョフが強調しているように「ソ連は戦争なき世界、武器のない世界を断固求めている」

ソ連は完全全面軍縮案をもっている。この軍縮案は、当然のことではあるが、危険度のより少ない世界をめざすものなら、部分的な軍縮措置をとることもあえて辞するものではない。

ソ連は実際的な軍備制限措置や軍縮措置を実行する用意のあることを実際に証明した。この分野で30以上の国際協定が結ばれたのはほかでもないソ連の提唱によるものだった。ソ連ほど、軍事対決の程度を引き下げるための建設的な考えや計画や提案をした国は世界中にない。わが国は、核兵器を最初に使用しないことを、厳かに義務として宣言した。またわが国はもう一つの義務、すなわち、核兵器を生産せず、持たず、その領土内に置かない国に対しては決して核兵器を使わないという義務をみずから負った。またソ連は自国兵力を一方的に削減するという措置を一度ならずとったが、西側からは然るべき反応がなかった。

終戦以来ずっと軍拡競争の先頭を走ってきたのは、ソ連ではない。新しい兵器体系の開発のイニシアチブをとってきたのはソ連ではない。従って、軍拡競争を新しい段階や方向に導いた罪は、ソ連にはない。

軍拡競争がますます気違いじみたものになっているいま、ソ連は軍縮問題の実際的解決にますます励むことを自分の責務と考えている。ソ連は、存在している限りのすべての種類の兵器を、相互主義の建て前で、制限し、縮小もしくは廃絶する用意のあることに絶えず注意を喚起している。ソ連は核兵器の生産を停止し、全体としては核兵器を廃絶することを提案している。欧州から中距離核兵器であれ、戦術核兵器であれ、あらゆる種類の核兵器を撤去すること、欧州から化学兵器をなくすことを提案している。ソ連は地球上のいたる所に非核地帯を設置することに賛成している。ソ連は、戦争を引き起こさないために国際法上の保障を設け、まず最初に核兵器も通常兵器も使わないこと、全体として国際関係に武力を行使しないことにするのが必要だと考えている。ソ連は、世界中のすべての国が参加する世界軍縮会議を招集して、勧告などではなく、すべての国に拘束力をもつ決定を採択することを根気よく提案している。

ジュネーブのソ米包括軍縮交渉でソ連は地球上の軍拡競争を停止し、また軍拡競争を宇宙に移させないようにしようとしている。

ジュネーブの軍縮交渉でソ米双方に受け入れられるような合意の達成を容易にするために、ソ連は軍縮交渉の期間中次のことを実施するよう米国に提案している。

(1) 攻撃宇宙兵器の開発（科学研究作業も含む）、実験、展開を凍結する。
(2) ソ米双方の戦略攻撃兵器を凍結する。
(3) 米国の中距離核ミサイルを欧州に展開すること、およびソ連とその同盟諸国が対抗措置を増強することを停止する。

ソ連は、中距離核兵器問題のような欧州とアジアで論議を引き起こしている問題の解決も成功させる用意がある。ソ連としては、中距離ミサイルとこれに装着する核弾頭を、NATO（北大西洋条約機構）側より多く持とうなどとは、全く思っていない。いま欧州に配置してあるミサイルのうち縮小すべき分は、モスクワはどこにも他へ移さずに廃棄してしまう用意がある。中距離ミサイルについて双方が受け入れられるような協定が達成された場合、ソ連はSS20ミサイルのソ連東部地域への展開を停止するつもりである。それは、もちろん、アジア地域における戦略情勢に重要な変化が起こらない場合に限られる。

ウィーンの中欧兵力・軍備縮小交渉で、ソ連とワルシャワ条約加盟の同盟諸国は、交渉開始から12年もの歳月を経た今日、実際的な協定を結ぶことを提案している。

ストックホルムの全欧安全保障会議で、ソ連とその社会主義同盟諸国は、欧州における軍事対決を緩和する大がかりな政治的・軍事的措置をとるよう主張している。

ジュネーブの軍縮会議でソ連代表は、包括的軍縮計画と、軍拡競争を個々の分野で抑制する案、とくに中性子兵器と化学兵器の禁止案の作成をめざしている。

ソ連は、ワシントンによって中断された、化学兵器の禁止、核兵器実験の全面的完全禁止、インド洋における軍事行動の制限、通常兵器の他国への売却・供給の規制などの重要な軍備制限問題に関する交渉を再開するよう呼びかけている。

現実そのもの、核の世紀の厳しい現実は、東と西の双方が戦争と平和の最重要問題の解決をめざして、また軍拡競争に歯止めをかける最重要な問題の解決をめざして、歩み寄ることを求めている。核戦争は決して不可避な宿命ではない。すべての国、全人類の努力を一つにすれば、それを未然に防ぐことができるし、またそうすることが求められている。こうソ連は強く信じている。だが、地球の上にぶら下がっているダモクレスの剣を取り除くためには、いろいろな国の国民を″ヒバクシャ″（被爆者）の運命におとしいれる核の″カミカゼ″（神風）から地球の安全を守ることが必要なのである。

XXVII

ソ連共産党第27回大会に向けて

ソビエト農村の社会的発展

本誌経済評論員　レフ・ボスクレセンスキー

民を養う者、すなわち農民の食が足り、農民が幸せなときにのみ、民も食が足り、幸せになる——ある賢者はこう教えている。

ソ連国民の大部分が飢えかけていた戦後の40年代末のことをまだ忘れていないし、一番年をとった世代の人々が本当の飢えを体験したことがあるのはたしかだが、ソ連の農民については、幸い、ずっと前から、飢えは問題になっていない。いまソ連国民に食物を供給する上でまだ解決されていない問題があるとすれば、それはまず肉製品や乳製品、生鮮野菜、果実など最も高級な食料品に対する高まりつつある需要をみたすことである。一言つけ足すと、農村ではこの問題は都市ほど差し迫っていない。食生活の内容は農民の方がいいのである。パン、麦粉製品、砂糖、牛乳、魚の供給不足はとうに解消し、上等のチーズ、ソーセージ、薫製品、上等の茶、嗜好品の需要が高まっている。

こういう訳で、農村の社会的発展計画の上で食料問題は、いわば第二義的な地位しか占めていない。また、この数年のあいだに、農民と工業労働者の所得の格差もそれほど問題ではなくなった。コルホーズ農民の労働報酬もこの間ぐんぐん伸びて、物質的福祉の水準でも、購買力でも、蓄積の大きさでも農村は都市に追いつき、いくつかの地域（バルト海沿岸、ザカフカズ、モルダビア、中央アジア、ロシアとウクライナの南部諸地域）ではことによると、都市を追い越してさえいる。

では、最も重要な問題はなにか？

それは、サービスと医療の改善、道路・交通網の拡充、農民の技能と機械知識の向上などだ。これらは一九八六—一九九〇年の国の社会・経済発展計画のなかにのこらず組み込まれているが、このなかにも、その緊急性が他を圧している問題がある。それは住宅建設、その速度と質という問題である。

農村に住む人間が一番必要としているものはなにか、農民の仕事の質に一番影響をおよぼすものはなにか、農村の人口状態を正常化し、労働資源の適正配分問題の解決を容易にするものはなにか——これらをわが国のどこで質問しても、それに対するコルホーズ（集団農場）やソフホーズ（国営農場）の指導者たちの答えは判で押したように決まっている。設備のととのった、暮らしよい住宅というのがそれである。実は、これこそソ連農村の社会発展計画の核心なのである。

農村にはソ連の全人口のほぼ$\frac{1}{3}$が住んでいる。農業人口、つまり農民とその家族はソ連の人口の$\frac{1}{4}$である。今世紀の終わり頃になると、農業の就労人口はかなり減る（現在の半分になるという専門家もいる）と見られているが、それでも住宅問題は決して最重要の意義を失わない。

住宅建設の発展をふくむ農村の社会発展計画は、ソ連で採択されたいわゆる80年代の食糧計画の欠くべからざる一環である。では、この分野でどんな成果があがったか、また近い将来の見通しはどうか？

過去15年の間に農村で建設された住宅は約五億平方m、すなわち一人当たりほぼ5平方mである。その結果、農村における住宅の平均供給面積は都市の水準を上回った。農村の住宅にはすべて電気が引かれており、また社会的フォンドで建てた住宅（ソフホーズおよびコルホーズの公有住宅）10軒のうち7軒、私有財産権に基づく農民の個人所有住宅10軒のうち6軒は集中配管方式によってガスが引かれている。

しかしながら、行政区の中心地や、コルホーズやソフホーズの本部所在地に住宅建設が集中するというマイナスの傾向も現れた。また農村の新しい居住地区に都市型の共同住宅や高層住宅が多くなってくるのもあまり合理的ではないことが分かってきた。

そこで、80年代には個人住宅の建設を促進するという方針がとられた。ついこの前までは″展望がない″とみなされていた小さな村までもが、今では高い関心の対象となってきた。それに応じて、農村における住宅建設の融資内容も変わってきた。個人住宅と協同組合住宅の建設を全面的に奨励し、そのために新しい特典を設けた。なかでも、個人住宅を建てる者を対象とする国家融資のワクが広げられた。

現行の5ヵ年計画（一九八一—八五年）が終わるまでには農村地域では二億七六〇〇万平方mの住宅が使用に供されるはずである。その次の5ヵ年計画（一九八六—九〇年）では二億二〇〇万—二億八〇〇〇万平方mの住宅を建設することが計画されている。こういうわけで、80年代の住宅建設は70年代に比べて六一五〇万—六七五〇万平方mの増になる。現在住んでいる住宅の本格的な改修や、上下水道本管への一本化やガス管敷設に要する費用の融資ワクが広げられていることも、かなり重要だ。

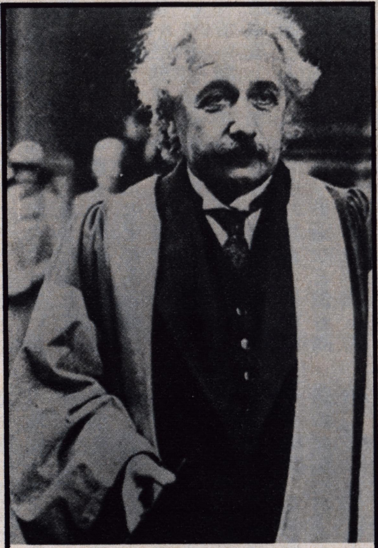
住宅問題の解決が最重要の問題である以上、この一つの事例から判断しても、ソ連農村の社会的発展の見通しはきわめて有望だと言える。

核兵器に反対した原爆の開発者たち

ファシスト・ドイツがすでに敗北した1945年7月、米国ニューメキシコ州のアラモゴードの空軍基地で世界初の原爆実験が行われた。軍事目的での核エネルギー使用の可能性を実質的に証明したこの爆発と、その後のアメリカの原爆による広島、長崎の壊滅は、直接あるいは間接に新兵器の出現に関与した学者たちに、新兵器に対する自分の立場を決定することを迫った。世界に名だたる物理学者たちは当時すでに警告を発し、核兵器が人類にとってきわめて危険であることを示し、核エネルギーをもっぱら平和目的に利用することを訴えた。

アルバート・アインシュタイン

(1879—1955)



「ドイツ人が原爆製造に成功しないことが分かっていたなら、私はけっして、その開発に指一本触れなかっただろう……」

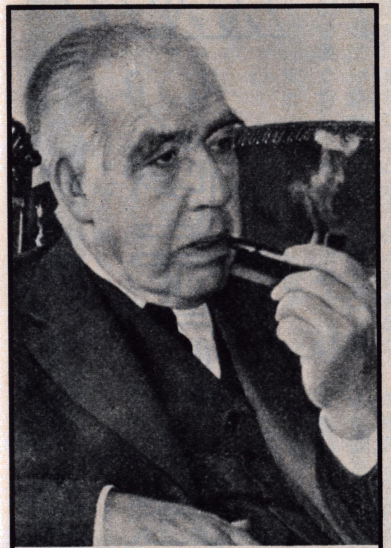
“現代理論物理学の父”と呼ばれるノーベル物理学賞受賞者のアルバート・アインシュタインは戦後こう述懐した。

1945年4月。アインシュタインは原爆は無用な物であるから凍結せよと呼びかけた手紙を米国大統領に書き送る。しかしホワイトハウスの長であるトルーマンは学者の警告を無視した。アインシュタインは、ヒトラーの独裁政権ではなく、いわゆる“民主世界”が非人間的な大量殺人兵器を最初に開発し、使用したという信じ難い事実にうちのめされる。

1947年、彼は悲しみをこめてこう述べている——「原子爆弾は、ドイツ人による核兵器使用（それが作られた場合）に反対する予防的措置として米国で作られたことを忘れるべきではない。ところがいまわれわれは、先の戦争における敵の軽蔑すべきやり方をまね、すっかり身につけてしまった」

ニールス・ボーア

(1885—1962)



著名なデンマークの理論物理学者ニールス・ボーアは原子核内にあるエネルギーの軍事的利用の可能性を最初に知っていた一人である。彼はまた核兵器に公然と反対した最初の一人でもある。

1944年、ボーアはイギリスのチャーチル首相に核兵器の独占を期待することはできない、ソ連が自国の原爆を製造するのは不可避で、そのあとには激しい軍拡競争が続くだろうから、と提言した。

ボーアは米国に行き、ルーズベルト大統領に会って話し、理解してもらえたと思った。しかし1944年9月に行われたチャーチルとルーズベルトの会談の結果は、西側の二大政治家がボーアの警告に耳をかさなかったことを示した。それどころかイギリスに戻ったチャーチルは、科学問題の個人的な顧問であるチャーウェル卿にこう書き送ったのである——「ルーズベルト大統領と私はボーア教授のことを真剣に憂えている。どうして彼に仕事などさせられようか？ボーアは隔離すべきだと思う……」

レオ・シラード

(1898—1964)



ハンガリー生まれの物理学者レオ・シラードは米国の原爆開発計画を提唱した一人だった。彼は1943年と44年にはナチス・ドイツが先に原爆を製造するかもしれないと心配していたが、45年には米国政府が他の国に対して行い得ることを恐れ始めた。

1945年の夏、シラードとノーベル物理学賞受賞者J・フランクのイニシアチブにより、著名な学者グループが核兵器の軍事的使用の結果に関する自分たちの結論を詳細な報告にして出した。シラードは次のようなことばでこの報告を結んでいる——「われわれは、日本攻撃のために原爆を使用しないようにと呼びかけることが自分たちの義務だと考える。もしも米国がこの盲目的な破壊兵器を最初に人類に向ければ、米国は世界の世論の支持を失い、軍拡競争を促し、同種の兵器の規制に関する国際協定の合意の可能性を奪うことになろう」。

この報告は45年6月15日、スチムソン米陸軍長官に手渡された。その答えは周知のところである。同年8月、米国の原爆は広島、長崎に投下された。

ロバート・オッペンハイマー

(1901—1967)



彼は世界初の原爆製造計画に指導的役割を果たした。アラモゴードで原爆実験が行われたときオッペンハイマーは、アメリカのジャーナリスト、ローレンスの質問に対し、ヒンズー教の聖典とされる宗教叙事詩マハーバーラタの一節バガバッド・ギーターから引用して答えた。

“もしも何千もの太陽が
一度に空で燃えたなら、
人は死に至るだろう、
地をおびやかす死に”

広島と長崎の原爆投下後に行われたトルーマン大統領のレセプションでオッペンハイマーは力ない怒りをこめて、原爆を作った自分の頭脳と手を呪った。その頃彼はこう言明した——「核兵器は広島で実地に使われた。これは侵略と不意打ちと恐怖の兵器だ」

1953年、オッペンハイマーは米国の行政機関により“不忠”をとがめられ、機密に関係することを禁止された。

フレデリク・ジョリオ＝キュリー

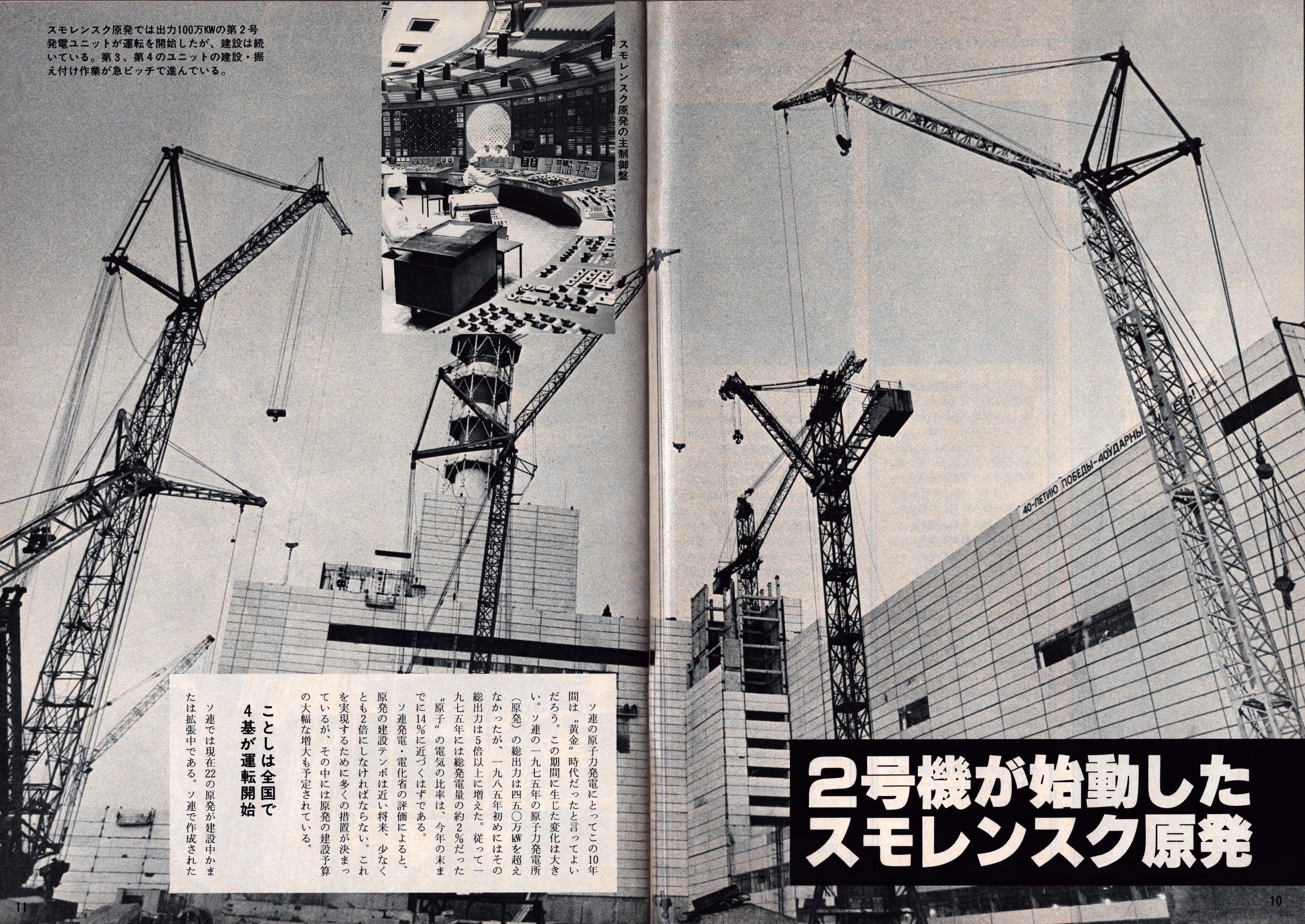
(1900—1958)



フランスでは物理学者フレデリク・ジョリオ＝キュリーが初めて、ウラニウム原子核崩壊の連鎖反応を実証した。1930年代の末、彼は原爆製造に携わった。第2次世界大戦後、フランス原子力委員会委員長となったジョリオ＝キュリーは、軍事的性格の仕事を断固拒否する態度をとり、そのため米国の圧力で罷免された。

40年代の末、ジョリオ＝キュリーは世界平和評議会の議員に就任。1949年4月、パリで開かれた第1回世界平和擁護者協議会で次のように述べた——「われわれの責務は軍事目的での原子力を非難し、科学のこの歪曲を責め、核兵器使用の非合法化の提案者に加わることである」

2号機が始動した スモレンスク原発



スモレンスク原発では出力100万KWの第2号発電ユニットが運転を開始したが、建設は続いている。第3、第4のユニットの建設・据え付け作業が急ピッチで進んでいる。

スモレンスク原発の主制御盤

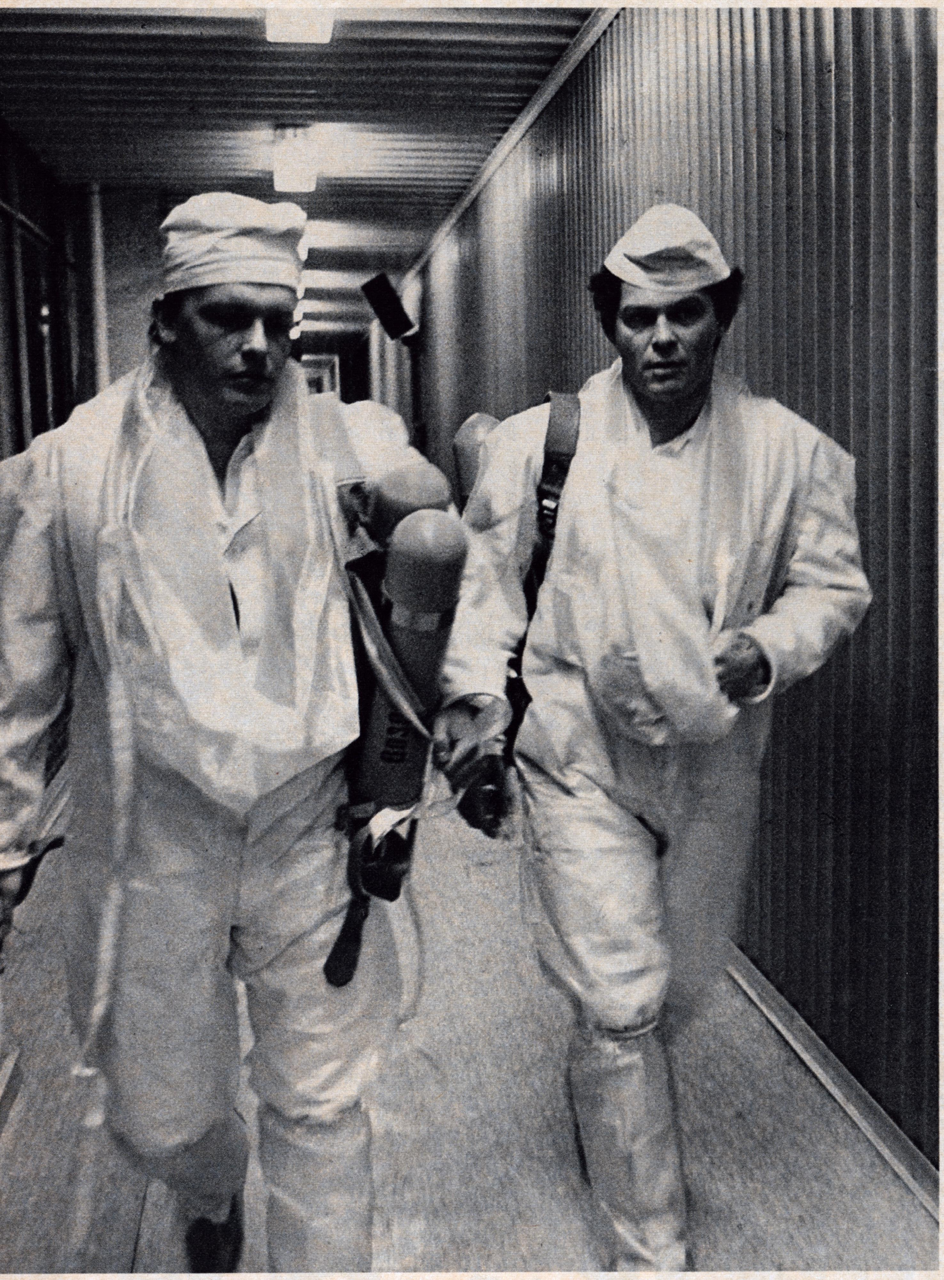
ソ連の原子力発電にとってこの10年間は〝黄金〟時代だったと言ってよいだろう。この期間に生じた変化は大きい。ソ連の一九七五年の原子力発電所（原発）の総出力は四五〇万kWを超えなかったが、一九八五年初めにはその総出力は5倍以上に増えた。従って一九七五年には総発電量の約2％だった〝原子〟の電気の比率は、今年の末までに14％に近づくはずである。

ソ連発電・電化省の評価によると、原発の建設テンポは近い将来、少なくとも2倍にしなければならない。これを実現するために多くの措置が決まっているが、その中には原発の建設予算の大幅な増大も予定されている。

ことしは全国で4基が運転開始

ソ連では現在22の原発が建設中かまたは拡張中である。ソ連で作成された

▶スモレンスク原発第2号発電ユニットの中央原子炉室

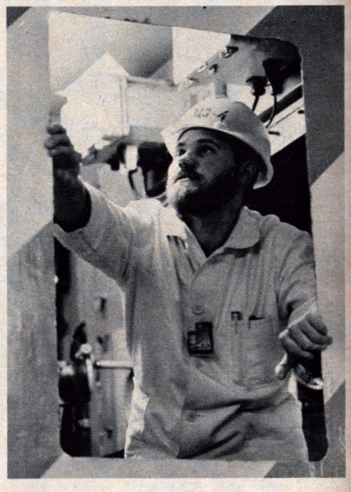




スモレンスク原発第2号ユニットの制御盤。監視・測定器を見守る交替作業組長のK・モルチャノフ（左）とA・レズニコフ技師。

◀特殊な気密服のおかげで原発職員は安心して危険区域に入ることができる。

燃料取り出し・装荷機の主任運転員ビクトル・バリノフ



原子力発電の発展構想は、主要な電力消費者が集中し、伝統的な燃料基地の資源が著しく減少したソ連欧州部に、幾つかの大規模原発（四〇〇万—七〇〇万kW）を急いで建設することを前提としている。

ことしはソ連全体で出力各一〇〇万kWの新型原子炉4基の運転開始が計画されている。しかしそのうち、新発電所の操業開始を意味する原子炉の運転開始は一基だけである。これはボルガ川中流のサラトフ市近郊に建設中のバラコボ原発の第1号発電ユニット（つまり原子炉、タービン、発電機のセット）で、その他の原子炉は既設の原発で据え付け中かまたはすでに完成している。スモレンスク原発、ザポロジエ原発ではこれはそれぞれ2基目の発電ユニットであり、クールスク原発では4基目の発電ユニットになる。

これら4基の新しい原子炉は、出力



電気機械組立工作業班長のニコライ・サモイロビチ



では同じだが、ソ連で開発された二つの異なるタイプの構造に属する。ザポロジエ原発とバラコボ原発では軽水炉（VVER一〇〇〇）が、クールスク原発とスモレンスク原発では黒鉛減速チャンネル型炉（RBMK一〇〇〇）が据え付けられている。後者は、時々まだ〝ロシア型〟と呼ばれることがある。このチャンネル型原子炉は一九五四年にモスクワ近郊のオブニンスクで始動した世界最初の原子力発電所に据え付けられたからである。

RBMKの長所の一つは原子炉を止めずに、〝稼働中に〟燃料を取り替えることができることにある。RBMK一〇〇〇はその性能を十分に証明ずみの構造である。この型の原子炉は、世界の大規模原発の中に入るレニングラード原発、チェルノブイリ原発、クールスク原発ですでに数年間順調に稼働している。

これらの発電ユニットの運転経験は、この機種をベースにしてさらに大出力のRBMK一五〇〇（一五〇万kW）を開発することを可能にした。この出力の最初の原子炉はリトワ共和国のイグナリナ原発に据え付けられた。イグナリナ原発では現在第2発電ユニットが建設されている。

八〇年代になってからソ連ではVVER一〇〇〇の新世代の原子炉が量産されるようになった。アナトリー・アレクサンドロフ・ソ連科学アカデミー総裁の意見によれば、これら二つの型の原子炉の現在の出力レベルは最適である。近い将来、ソ連の原子力発電の中核になるのは、これらの〝ミリオン〟級原子炉だ。そのためにはもちろん、燃料サイクル、個々のユニット、制御系と安全系の改良が続けられる。

保証された安全性

原発の長所はかなりはっきりと現れている。第一に、伝統的な燃料の節約。一〇〇万kWの原子炉は年間約二〇〇万tの石油または三〇〇万tの石炭を節約する。第二に、輸送費の著しい削減。これら数百万tの石油または石炭を運ぶ必要がなくなるからだ。第三に、顕著な生態学的メリット。原発は、普通の火力発電所のように、酸素を燃やしたりしないし、浮遊粒子物質やばい煙、排出ガスで空気を汚したりしない。

にもかかわらず原発の広い舞台への登場は（現在世界には約三〇〇の原発が稼働している）、あまり歓迎されなかった。一般に原発にまつわる偏見は容易に説明できる。多くの人々は〝原子〟という言葉で直ちに原子爆弾を連想するからである。だが、原発における核爆発は原理的に不可能なのだ。「原子炉の構造、核分裂性物質と吸収物質の組み合わせ、核燃料の構造——これらすべてが原子炉の爆発を不可能にしている」——これはゲンナジー・シャシャリン・ソ連発電・電化第一次官の権威ある意見である。

しかし、もう一つの問題——放射線が残る。この危険の現実性はどの程度のものなのか？　ソ連保健省の監視資料によれば、ソ連の原発の職員が1年間に受ける被ばく線量は、通常のX線検査1回で受ける量よりも少ない。X線検査室への入室を非常に危険だと考える人は少ないだろう。原発が置かれている地域の住民の原発に対する態度も、この見地から極めて示唆的である。たとえば、日曜日にはウラルのベロヤルスク原発の貯水池の岸に数千人の釣り人が集まるし、中部ロシアのクールスク発電所の貯水池はヨットマンたちのお気に入りの場所になっている。

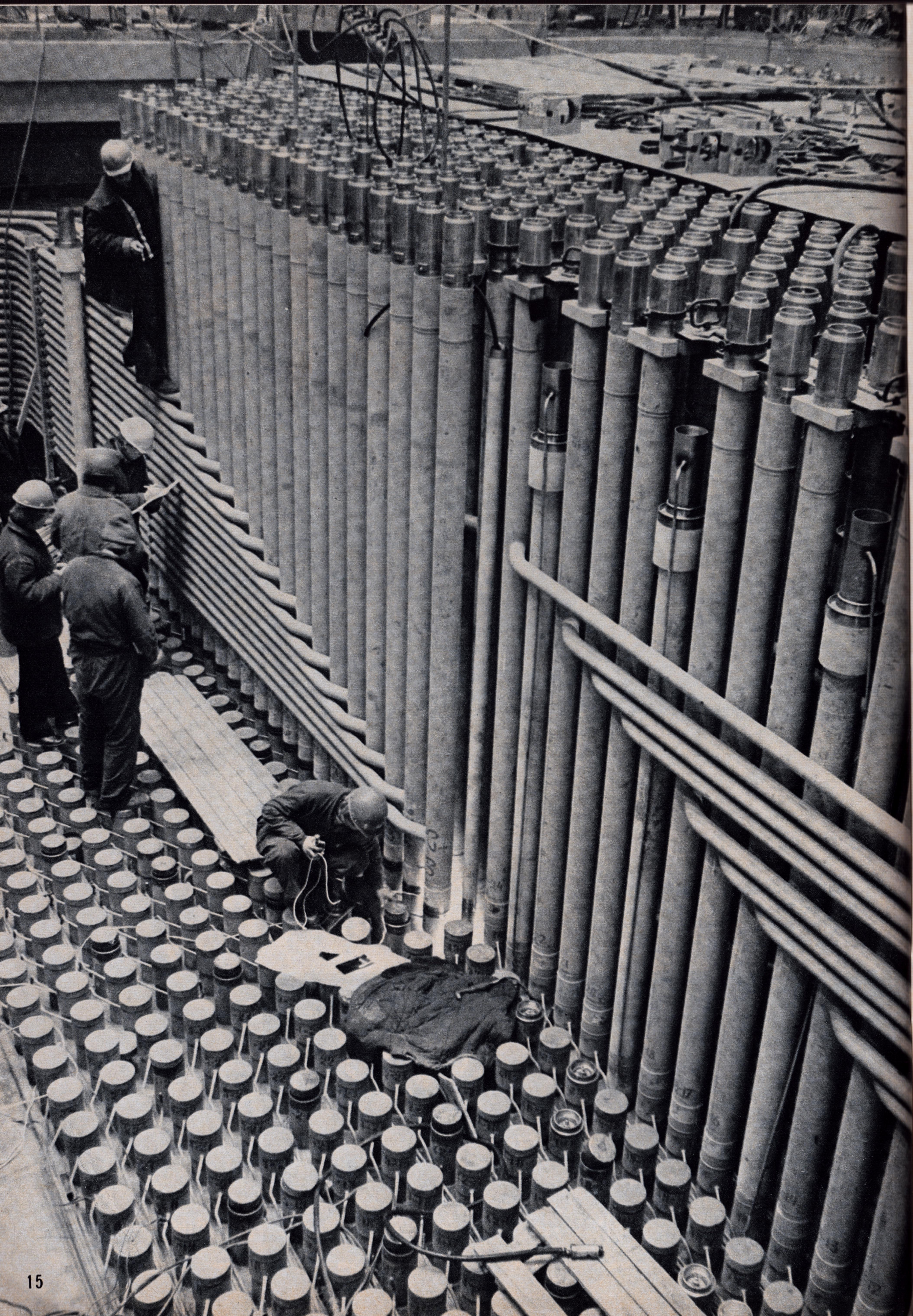
六〇〇万KWめざす スモレンスク原発

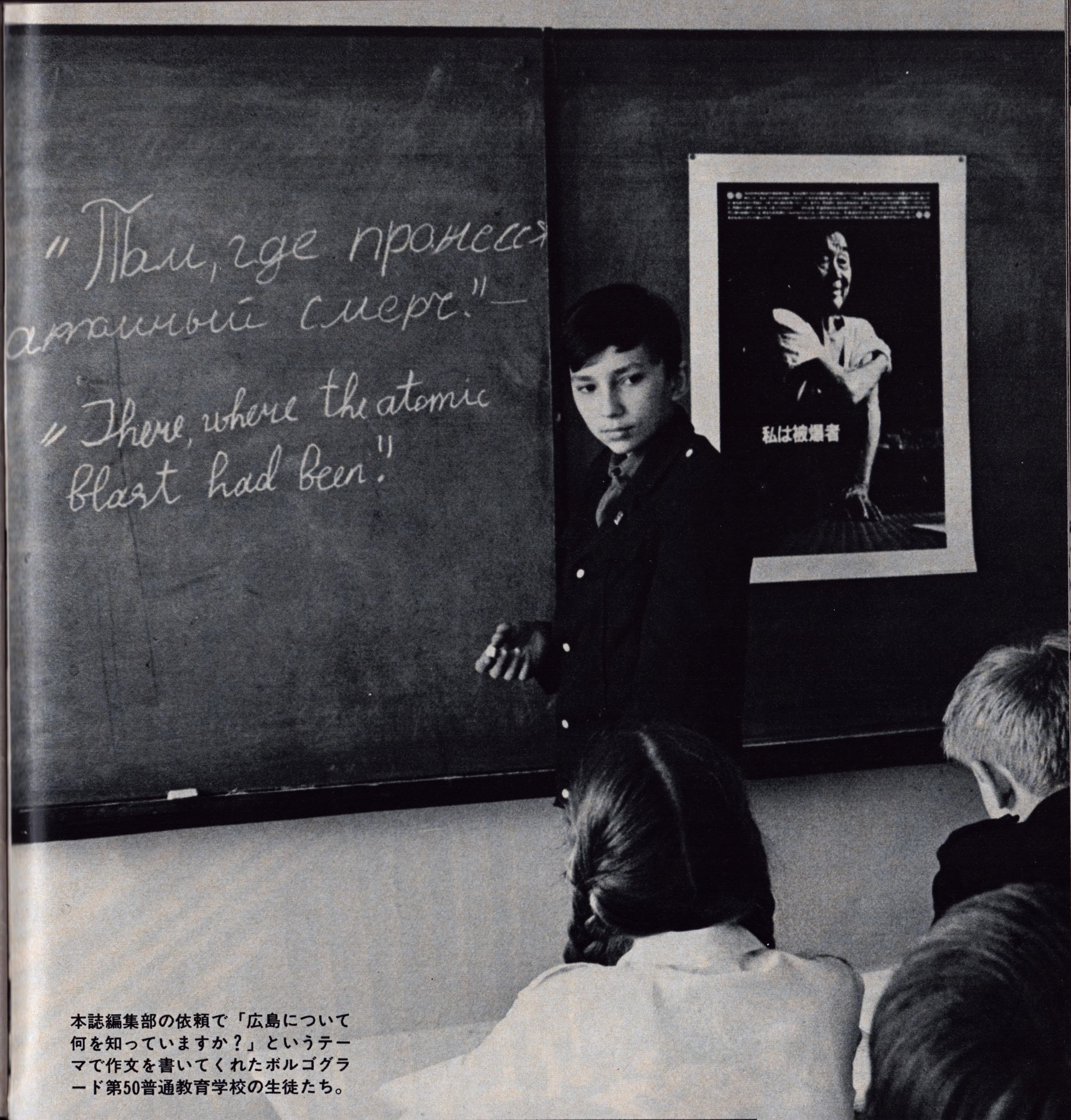
デスナ河畔のシラカバ林の中の美しい場所にスモレンスク原発の建設・運転関係者の町デスノゴルスク（モスクワ西方三五〇km）がある。

その第1号発電ユニット（出力一〇〇万kW）は一九八二年12月に発電を開始し、一九八三年10月に設計出力に達した。今年の5月、スモレンスク原発で記念すべき出来事があった。原子炉が成功裏にテストされ、始動した後に、第2号発電ユニットが運転を開始したのだ。2基の発電ユニットがスモレンスク原発の第1期工事分である。全部で3期の工事が予定されており、同原発の総出力は約六〇〇万kWになる。

スモレンスク原発の最初の2基の発電ユニットの調整と運転開始にあたっては、安全問題に最大限の注意が払われた。そのため、自然災害の場合でさえ環境への放射能漏れは全く起こらないと断言できる。専門家はたとえば原発の回路の中を循環する水から高いレベルで不純物を除去することがどれほど重要であるかを知っている。スモレンスク原発の発電ユニットの中には14の効果的な浄水系が含まれている。デスナ川の貯水池を汚染する可能性は完全に取り除かれている。原発を中心とする半径45kmの地域の土壌、植物性堆積物、水、水底の泥土の試料の精密な検査は、事実上、自然放射能バックグラウンドしか示していない。それは最大許容量の数百分の一である。

◀原子炉の汽水分離器の組み立て





本誌編集部の依頼で「広島について何を知っていますか？」というテーマで作文を書いてくれたボルゴグラード第50普通教育学校の生徒たち。



教室で作文に取り組む生徒たち

〝私が知っているヒロシマ〟

——姉妹都市ボルゴグラードの中学生たちの作文から

「ぼくが初めて広島と長崎の悲劇を知ったのは6歳か7歳の時でした。テレビでアニメを見ていました。それが終わると〝国際パノラマ〟という番組が始まりました。外に遊びに出してもらえなかったので、アナウンサーの言ってることはほとんどわかりませんでしたが、とにかくその番組を見始めました。急に画面が白黒になり、黒い石の山と、ものすごくたくさんの焼けこげた死体が見えました。ぼくはとってもびっくりしました。でも一番ショックだったのは、どこかの建物の前に立っていた人が、爆発のあと、壁に影しか残らなかったという話でした。

その時はただ、一九四五年にアメリカが、名前も知らない日本の二つの都市に二つの恐ろしい爆弾を落として、その都市のたくさんの人が死んだということしかわかりませんでした。

いまはもっとずっとたくさんのことを知っています」

これは広島の姉妹都市ボルゴグラードの14歳の中学生アレクセイ・プロコフィエフの作文の一節だ。彼はボルゴグラード第50普通教育学校の生徒である。この学校はボルゴグラードに一四五ある学校の中で、とりわけ目立つわけでもなく、7歳から17歳までの生徒一〇〇〇人余りが学んでいる。

実は「今日のソ連邦」誌編集部は、この学校で学んでいる生徒に「広島の悲劇について何を知っていますか？」というテーマの作文を依頼したのである。その結果、13歳から16歳までの生徒から34点の作文が寄せられた。前掲の作文はそのうちの一つなのである。

生徒たちはさまざまなきっかけから40年前の広島の悲劇を知っていた。オクサーナ・フラモワはソ連のジャーナリストのフセボロド・オフチンニコフの『相生橋の人影』（児童図書出版所）を読んだ。リュドミラ・ゼムリャンスカヤはお母さんから話を聞いた。ナタリア・ブロワはテレビの記録フィルムを見た。しかし生徒たちが広島のことをどんな経路で知ったにせよ、全員が一様にショックを受けていた。

イリーナ・クブリツカヤ（14歳）はこう書いている。

「初めて広島のことを知ったとき私はショックを受け、こういうことを理解するにはまだ自分は小さすぎると思いました。でも大きくなったいまでも、心と理性をもった人がどうしてこんな狂気を行ったのか、理解できません。アメリカのパイロットは家や学校を爆撃しただけではありません。たくさんの人の運命や幸福、彼らの現在と未来も爆破してしまったのですから。

日本の二都市へ原爆が落とされてから40年たちましたが、このことを考えたり書いたりするといまでも恐ろしくなります。私は40年前にドイツ・ファシストによってやはり根こそぎ破壊された都市に住んでいます。ソビエト国民は廃虚と灰の中から愛するボルゴグラードを復興しました。日本の国民も自分たちの都市を復興しました。私は広島の私と同じ年頃の人に、将来のこと——自分自身や世界の将来のことをどう思っているかききたいです。

いつ爆破されるかしれないような世界は誰も欲しくありません。私たちソ連の子供たち、そして日本の子供たち、はてしない地球のすべての少年少女たちはボルゴグラードと広島の悲劇がくり返されるようなことを許してはなりません」

リュドミラ・セルゲーエワ（13歳）は日本の少女佐々木禎子さんのことを思い出して書いている。彼女は作文の中で世界中の子供たちが、折り紙でツルを折って彼女を励ましたことを書いている。しかし結局佐々木禎子さんは死んでしまった。作文の筆者リュドミラは、今でも日本には原爆の後遺症に悩んでいる人がいることにふれている。毎日が彼らにとって耐え難い苦しみであり、薬もきかず、時間は彼らの苦し

みを増していくのみだということを知り、リュドミラは作文の最後をこう結んだ。

「子供たちの幼年時代が明るく、不安のないものであるように、子供たちが戦争とは、原爆とは何であるかを知らないように、いま私たちみんなが平和のためにたたかわなくてはいけないと思います」

ボルゴグラードと広島が姉妹都市であることはどの生徒も知っている。

アレクサンドル・アレシケビチ（14歳）はこう書いている。

「ボルゴグラードと広島の運命には、共通点がたくさんあります。両市とも戦争中とてもひどい被害を受けました。ボルゴグラードはソビエト国民の勇気と不屈のシンボルとなり、広島は平和な日本人の悲しみと苦しみのシンボルになりました。

ぼくは日本でたくさんの人が、地球上に新たなヒロシマができないように平和のためにたたかっていることを知っています。ぼくはその人たちに賛同します。愚かな軍拡競争をやめ、いまある核兵器をすべて廃棄するよう要求します。

日本の子供たちの頭上に平和な空と、平和だけがもたらすことのできる幸福があるよう願っています。広島の同じ年の友だちには、ぼくが住むボルゴグラードについて何を知っているか聞きたいと思います」

ボルゴグラードと広島の運命の共通点についてはリュドミラ・ゼムリャンスカヤ（14歳）も書いている。

「広島の中心に平和公園があります。反対側の相生橋には、むき出しの円屋根のある建物の骨組――原爆ドームが当時のままの姿で残っています。それは爆発後に広島の中心がどのような状態だったかを人々の記憶にとどめておくために残されているのです。

私たちのボルゴグラードにも大祖国戦争の激しい戦闘のときに破壊された家の廃虚が記念碑として残っています。でもその周りには新しい家々が建っています……

復興した私たち二つの都市にある悲しい記念碑は、いま生きている人たちに〝これはくり返されてはならない！〟といっているようです」

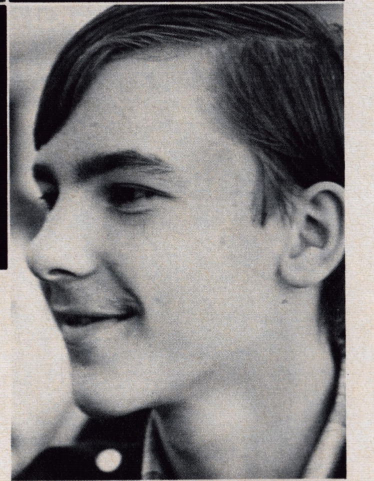


◀イリーナ・クプリツカヤ――「心と理性をもった人がどうしてこんな狂気を行ったのか、理解できません」



スベトラナ・リャーピナ――「広島や長崎をくり返したくありません。だから私たちは反戦集会やデモに参加し、核軍縮の呼びかけに署名するのです」





アレクサンドル・アレシケビチ――「日本でたくさんの人が、地球上に新たなヒロシマができないように平和のためにたたかっていることを知っています」



リュドミラ・ゼムリャンスカヤ――「復興した広島とボルゴグラードにある悲しい記念碑は、いま生きている人たちに〝これはくり返されてはならない！〟といっているようです」

スベトラナ・リャーピナ（16歳）はボルゴグラードの戦没英雄広場の永遠の火の前で見た情景を思い出して書いている。一人の中年の男の人が石段を上り、墓の前にひざまずき、花崗岩に口づけをしていた。立ち上がったとき、その人の目には涙があふれていた。スベトラナはその人がまっすぐ自分を見て、「どうか平和を大事にして下さい！」といっているような気がした。

彼女は作文をこう続けている。

「その呼びかけは私たちみんなに向けられたものです。私たちもそれに応えなくてはいけません。広島や長崎をくり返したくありません。だから私たちは反戦集会や反戦デモに参加したり、核軍縮の呼びかけに署名をしたり、コルホーズの夏の労働実習で稼いだお金をソ連平和基金に送ったりしているのです。

広島を破壊した〝核の剣〟はいまでは私たちの全地球の上におおいかぶさったのです。これは食い止めなくてはなりません！　行動するならいまです。新しい戦争の始まりを待つべきではありません。私たちは明日を生き、未来を築かなくてはいけないのですから」

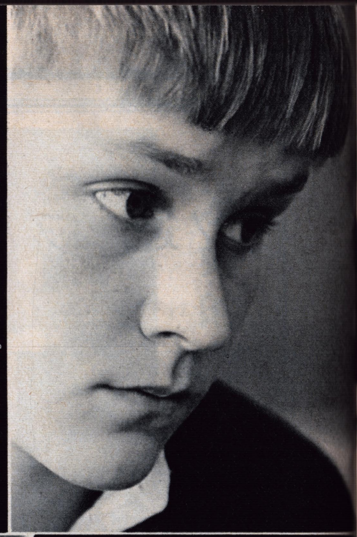
作文の多くは日本の同じ年頃の友人たちへ向けたこんな希望で終わっている。「私は日本の友だちに、楽しく健康に生き、しっかりと勉強するように望みます。でも大切なのは平和のためにたたかうことです。核兵器のない平和のために！」（リュドミラ・ゼムリャンスカヤ）

「ぼくが日本の友だちに言いたいことは、戦争があなたたちの人生の成功をけっしてじゃましないように、ということです」（アレクセイ・プロコフィエフ）

多くの生徒が日本の子供たちと文通をしたいと希望した。第50普通教育学校のビクトリア・ミトロファノワ校長は、広島の学校でボルゴグラードの生徒と英語で文通したいという学校があれば、歓迎すると語った。

ボルゴグラード第50学校の住所は次の通り。

Middle school No.50
d.6, St. Pugachevskaya,
Volgograd, 400001, USSR



◀アレクセイ・プロコフィエフ――「日本の友だちに言いたいことは、戦争があなたたちの人生の成功をけっしてじゃましないように、ということです」



◀リュドミラ・セルゲーエワ――「子供たちの幼年時代が明るく、不安のないものであるように、子供たちが戦争とは、原爆とは何であるかを知らないように、いま私たちみんなが平和のためにたたかうべきです」



◀オクサーナ・フラモワ――「オフチンニコフの『相生橋の人影』という本で広島の悲劇を知りました。とてもショックでした…」



◀ナタリア・ブロワ――「広島と長崎の犠牲者の記憶は私たち地球の住民みんなが平和闘争に力をそそぐことを義務づけています」

写真ニュース

ソ連・ブルガリア経済協力

6月7日、クレムリンでゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とT・ジフコフ・ブルガリア共産党中央委書記長・ブルガリア人民共和国国家評議会議長との会談が行われた。ソ連・ブルガリア関係の発展の諸問題を討議したさい、経済協力と科学技術協力の質的水準の向上、国民経済計画の調整、各国の生産力の最大限の利用がとくに重視された。ブルガリア首脳のこんどの訪問中に調印された2000年までの期間のソ連・ブルガリア間の経済協力と科学技術協力の長期発展プログラムは、先の課題の達成に役立つだろう。

双方は、国際情勢が全体として好転可能であることを強調した。双方の意見によると、バルカンをはじめ各地域に非核地帯を設置することは、緊張緩和に大きく役立つだろう。（写真はM・ゴルバチョフ(右)とT・ジフコフ



ソ連・チェコスロバキア関係の強化

5月31日、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はG・フサーク・チェコスロバキア共産党中央委書記長・チェコスロバキア社会主義共和国大統領と会談した。両国は核軍拡競争の中止と宇宙の非軍事化、社会体制の異なる国々の多面的な互恵関係の発展を支持することを表明し、社会主義共同体諸国の統一と団結を強化する必要があるとの信念を述べた。

G・フサークはモスクワの「チェコスロバキア一九八五」展の開会式に出席した。M・ゴルバチョフとG・フサークは二〇〇〇年までの期間のソ連・チェコスロバキア長期経済協力・科学技術協力計画に調印した。この計画は両国の経済協力全体の水準を高めるものである。

（写真は長期協力計画の調印式）



友好的だったソ伊会談



5月29日、クレムリンでゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とB・クラクシ・イタリア首相の会談が行われた。重要な国際問題とソ伊関係の発展問題について意見が交わされた結果、核戦争の脅威の除去、デタントの回復、社会体制の異なる諸国間のつっこんだ政治対話などの重要な問題で、接点を見つける可能性が両国にあることがわかった。

両首脳は政治的接触と協議を含めて、ソ連・イタリア関係が活発化していることを認め、今後さまざまな分野の両国の関係を拡大していくことに合意した。また現行の長期協定に基づき、ソ連、イタリア両国の通商・経済協力と科学技術協力を発展、改善する用意があることが確認された。

（写真はソ連・イタリア首脳会談）

ゴルバチョフ・ブラント会談

5月27日、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、W・ブラント・ドイツ社会民主党党首、社会主義インター議長と会談した。70年代の東西関係の前進は、社会体制の異なる国々に平和と安全を確保する気持ちがあれば、どんな難問でも解決できることを確認したと双方は指摘した。双方はソ連と西独間の正常な善隣関係を伸ばすことに賛成した。

双方はソ連共産党とドイツ社会民主党、ソ連共産党と社会主義インターとの結びつきが、双方の思想的立場の違いにもかかわらず、最近前向きに進んだことを認め、この関係をさらに深めるべきであると述べた。（写真はゴルバチョフ・ブラント会談）



天皇陛下が科学万博ソ連館をご訪問



6月26日、日本国天皇陛下は科学万博――つくば'85のソ連館を訪問された。陛下は展示をご覧になり、平和な宇宙開発事業でのソ連の成果を物語る展示物に特別の関心を示された。
　陛下のご訪問にあたり、P・A・アブラシモフ駐日ソ連大使がお出迎えした。

写真はソ連館でバイカル湖の展示をご覧になる天皇陛下。後列右から2人目――P・A・アブラシモフ駐日ソ連大使、3人目――N・D・フィリポフつくば科学万博ソ連政府代表。
（写真提供＝国際科学技術博覧会協会）

ソ連館三〇〇万人目の入場者

6月19日、科学万博のソ連館へ開幕以来三〇〇万人目の入場者が訪れた。この人は群馬県高崎市の主婦横尾喜代子さん。横尾さんはこの日、家族で2度目の科学博見物にやってきて、ソ連館を初めて訪れた。夫の電機販売業・武男さんは三〇〇万〇〇一人目、息子の小学6年・宏君は三〇〇万〇〇〇二人目の入場者になった。喜代子さんには花束とプレゼントが贈られた。
　写真はソ連館三〇〇万人目の入場者になった横尾喜代子さんとその一家。



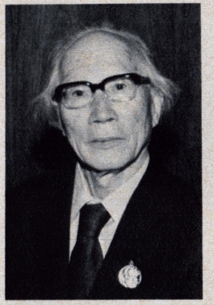
辻・日ソ友好議連事務局次長と佐藤・日ソ貿易協会専務理事にソ連対文連の友好促進顕章

6月12日、東京の駐日ソ連大使館で辻一彌三・日ソ友好議員連盟事務局次長と、佐藤哲雄・日ソ貿易協会専務理事に対するソ連対外友好・文化交流団体連合会の友好促進顕章伝達式が行われた。この顕章は両氏がその活動を通じて日ソ関係の強化、ソ日両国民の友好と善隣の促進に大きな寄与をしたことに対して贈られたもの。I・アブドラザコフ参事官から両氏に友好促進顕章が手渡された。
　辻氏は永年、日ソ友好議員連盟事務局次長として日ソ間の国会議員交流に尽くし、また、これまで4回にわたる日ソ円卓会議開催のまとめ役として大きな役割をはたした。
　佐藤氏は日ソ貿易協会のモスクワ駐在首席として日ソ間の貿易・経済交流に尽くすかたわら、日ソ間の社会団体の交流の仲介役として大きな役割をはたしている。
　写真は友好促進顕章を胸にあいさつする辻氏（右）と佐藤氏。





東郷正延・日ソ学院院長にプーシキン賞



このほど国際ロシア語ロシア文学教師連合（本部モスクワ）は、同連合の日本代表で日ソ学院院長・日本ロシヤ文学会会長の東郷正延氏に、同連合制定のプーシキン賞を贈った。これは東郷氏が日本でのロシア語の教育と普及に尽くした大きな功績をたたえるもの。6月14日、東京の駐日ソ連大使館でN・シレンコ参事官から賞状とメダルが東郷氏に手渡された。
　東郷氏は一九三一年東京外国語学校ロシヤ語科卒。戦後永年にわたり東京外国語大学で教べんを取る一方、NHKロシア語講座（ラジオ）を担当。現在は日ソ学院院長の仕事のほか、新しい露和辞典の編さんに取り組んでいる。東郷氏は「八杉貞利氏、ブブノワ女史などよい先生に恵まれた。76歳だがまだ元気なので、ロシア語教育・普及の仕事に一層努力したい」と語った。

催し物のお知らせ

☆ボリショイサーカス公演日程

東京・東京体育館（7月19−28日）、名古屋・愛知県体育館（7月30日−8月4日）、大阪・大阪城ホール（8月8−12日）、松山・愛媛県民館（8月14−16日）、福岡・福岡スポーツセンター（8月18−26日）、京都・醍醐スケートセンター（8月29日−9月1日）、筑波・エキスポプラザ（9月4−10日）、仙台・宮城スポーツセンター（9月13−16日）、前橋・群馬県スポーツセンター（9月20−23日）、横浜・横浜文化体育館（9月26−29日）、浜松・市体育館（10月3−6日）
▽お問い合わせは、エミー・インターナショナル内ボリショイサーカス公演本部（電話03・234・7207）へ。

☆ボリショイ劇場バレエ学校特別公演

東京・東京文化会館（7月17、18、19、20、21、22日）、筑波科学万博会場（7月26日）、長野・県民文化会館（7月28日）、群馬・県民会館（7月29日）、宮城・県民会館（7月31日）、宇都宮市文化会館（8月1日）、大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月9、10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・NHKホール（8月18日）。
▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

☆北海道・エルミタージュ美術館展

7月13日（土）――8月22日（木）（月曜休館、午前10時〜午後5時。会期中毎週金曜日は午後7時30分まで）
▽場所：北海道立近代美術館（札幌市中央区北1条西17丁目）
▽入場料：一般800円（600円）、高・大生600円（400円）、小・中生300円（200円）
※（　）内は前売・団体料金
▽お問い合わせは、北海道立近代美術館（電話011・644・6881）、北海道新聞社事業局文化事業部（電話011・221・2111）へ。

形を変える建物

50年後あるいは一〇〇年後、人々はどんな家に住むのだろうか？　将来の建築学の方向は？　つくば科学万博のソ連館の第2セクションではこのテーマで展示が行われている。展示品を準備したのはモスクワの建築理論・建築史中央研究所の専門家たちで、この研究所には建築バイオニクス実験室がある。

実験室長のユーリー・レベジェフは次のように語った――

「わが国の建築家は生きた自然の形や構造をますます建築に取り入れるようになっています。たとえばモスクワのオスタンキノ・テレビ塔は、植物の茎か樹木の幹の原理で建設されています。モスクワ・オリンピックの自転車競技場は、上から見ると、地上にとまって休んでいる巨大なチョウの形をしていますし、ルジニキのレーニン・スタジアムのスポーツ施設の一つはカニを思い出させます。

しかし、これらを作った人々は生きた自然をコピーしただけではありません。自然の中に広く見られる機械的な形態変化の原理を利用しているのです」

実験室の専門家たちはモデルの一つを〝樹木の家〟と名づけた。そこでは各階はらせんを描きながら互いに向きをずらしている。その結果、どのフラットにも日光が当たる。下のフラットの屋根がせり出した部分はスポーツコーナーや花壇、ルーフガーデンとして使うことができる。

可変式構造も興味深い。そのうちの一つはハゴロモグサからヒントを得たもので、この素朴な植物は葉をネギ坊主形に固く閉じ合わせることが



動物の骨格と筋肉からヒントを得た可変構造。軽量で丈夫なので極地で働く人のための住宅に利用できる。



植物の互生葉序をヒントにした水平面らせん状回転構造。これを応用すれば、すべてのフラットに日光が当たる集合住宅ができる。



植物の茎の原理を取り入れた耐震柔構造超高層ビルの模型。300階建ても夢ではない。

できる。これと同じシステムが建築に取り入れられた。葉に相当する部分を大きなドーム状の覆いにすることによって、平面の上に屋根を組み立てることができる。これは喫茶店やサーカスの屋根になる。

作り方が簡単なので最も人気があるのはカマボコ形の組立て式屋根だ。とはいえこれは、球形、円錐形、双曲線放物面形など、多様な形が可能である。このような形は都市の街区建設に一定の変化を与える。この原理は万博会場に出品されている北方での石油採掘者、地質調査隊員、木材伐採者用の住宅、つまり、人家から遠く離れて独立して働いている小集団のための住宅の模型にも使われている。模型の住宅は22人用（労働者18人とサービス要員4人）で、居間、寝室3部屋、食堂、台所から成っている。居間は応接間でもあり、住宅全体を結合する中央部である。ここには移動式ストーブ、机、肘かけ椅子があり、労働者はここで休息する。寝室にはそれぞれベッド6、机、個人用ロッカーが置かれる。

この住宅の基本的な構成要素は、屋根を形づくる折りたたみ式の木製の枠組みで、その上に2重構造の柔らかい屋根をかぶせる（26ページ右下の写真参照）。建物の個々のセクションは工場で作られ、現場では水平面と結合した枠組みを押し広げることによって壁と屋根を作る方法で、3—4時間で組み立てることができる。

可変式の建築物には多くの利点がある。最大の利点は恐らく、建設産業の一定の発展水準のもとで、短期間しか利用しない家を建てるという贅沢が許されることだろう。なぜなら、家はすぐ流行遅れになり、古くなってしまうからだ。そのときは快適だった建物も、数年後には不便になってしまう。工場なら進歩から取り残されたものになってしまう。だから現在の状況では可変式の建築様式の採用がいちばん妥当だということになる。

建築家はつねに将来を見越していなければならない。ソ連ではレニングラード、キエフ、トビリシその他の都市の専門家が建築バイオニクスに取り組んでいる。



建築バイオニクスは自然界の生体メカニズムを建築に応用する

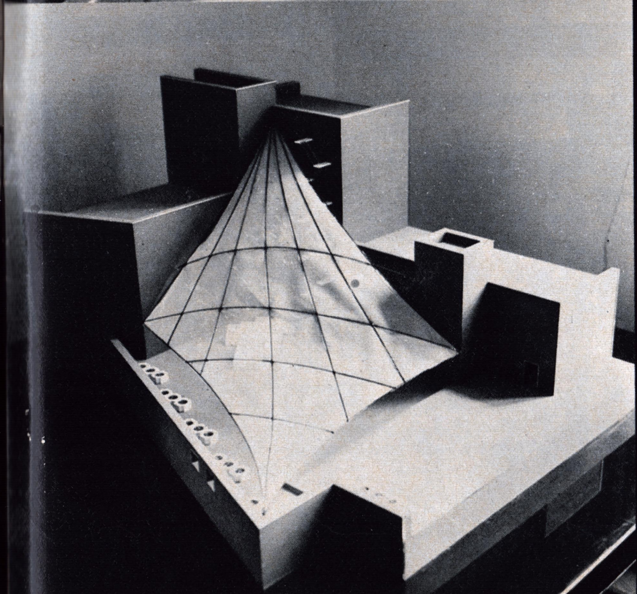


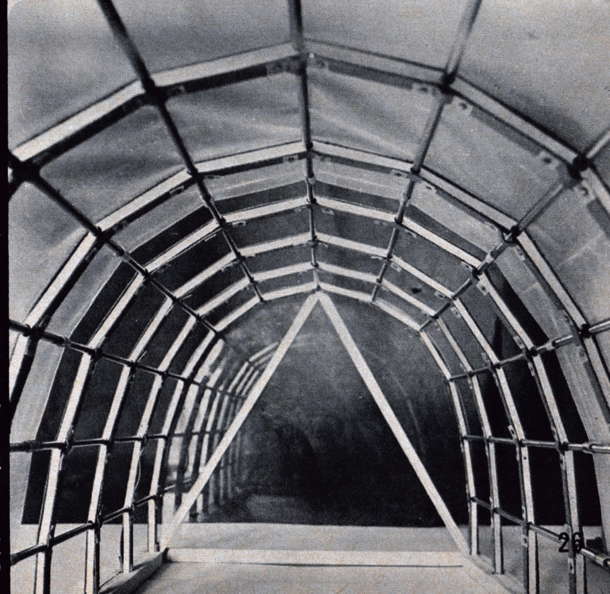
昨年の秋モスクワで開かれた「自然の形態構造」展のコーナーの一つ。いちばん手前の模型はハゴロモグサからヒントを得た構造。

▶タガンカ・ドラマ・コメディー劇場の夏季屋外舞台用に設計されたテント式の屋根



網状の吊り屋根





▶運搬可能な組立て式住宅。木枠を広げ、2重の覆いを張る。

平和を訴える広島の姉妹都市 ボルゴグラード

ボルゴグラード駐在本誌記者 アレクサンドル・エブレイノフ
カメラ V・チェルノフ L・パラジン



市の中央製粉所に残る当時の激戦の跡

ボルゴグラードの中心部の夕方



この10年間に建設された高層アパート群



「生まれくる者に平和を」——若い制作者たちはこの作品にこんな名をつけた。



先ごろボルゴグラード（旧称スターリングラード）のある地区のアパートの建設現場で、戦争中から置きざりになっていた鉄の筒が見つかった。その中に書き付けが押し込んであり、40数年たってかなりぼろぼろになったその紙片にはこう書かれていた。

「もうどうやらいとしい私のまちを見る機会はあるまい。いま残っているのは5人。敵は終日攻撃を加えている。いずれ戦死は間違いないが、降伏はしない。われわれの中には卑怯者はいな

い。

まちはひどい状態だ。しかし私は、生き残った人々が新しいすばらしいまちを建設するものと信じている。ロシアを屈伏させることはできない。私のいとしいまちがどうなるか、せめてひと目なりとも見たいものだ。

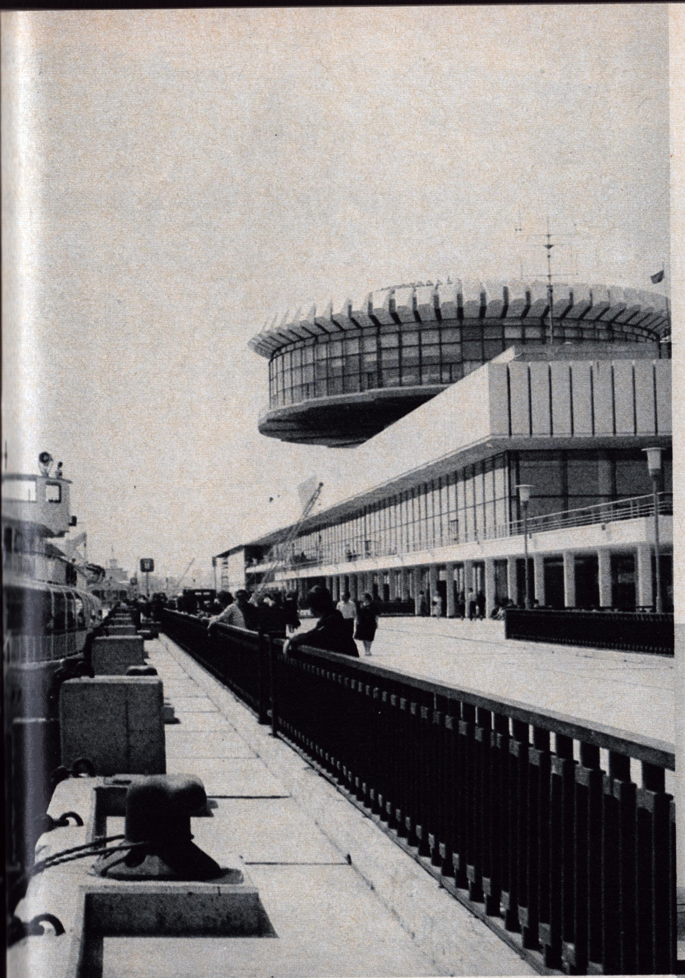
親衛中尉、P・ミナエフ」

まちはどのように復興したか

現在のボルゴグラードの町を歩きながら、私はこの勇敢な中尉の書き付けの文句を頭の中で反すうしていた。人々は廃虚と灰のなかからまちを復興しただけではない。無事生き残った人々とその子供たちはスターリングラードを守って死んでいったすべての

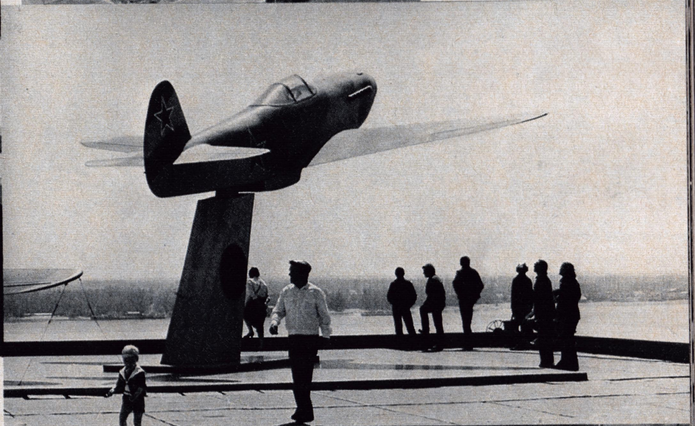


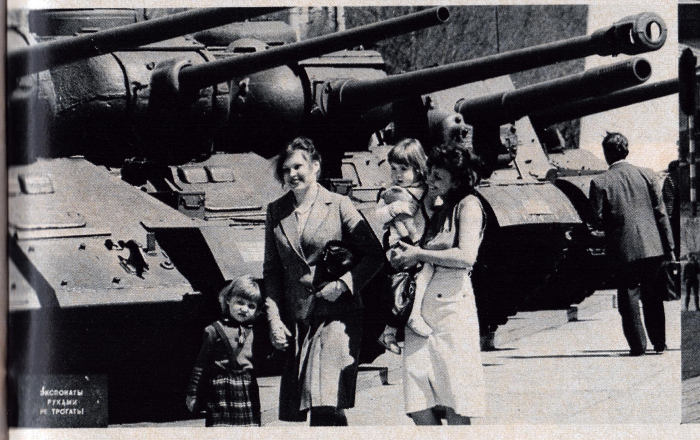
ボルガ川遊覧船の発着所





記念館「パブロフの家」——一九四二年秋、ヤコフ・パブロフ軍曹指揮の24人の偵察兵が優勢なドイツ軍と58日にわたって戦った4階建てアパートの壁面











右上　パノラマ博物館わきに展示されているスターリングラード戦で活躍した戦闘機、Yak3

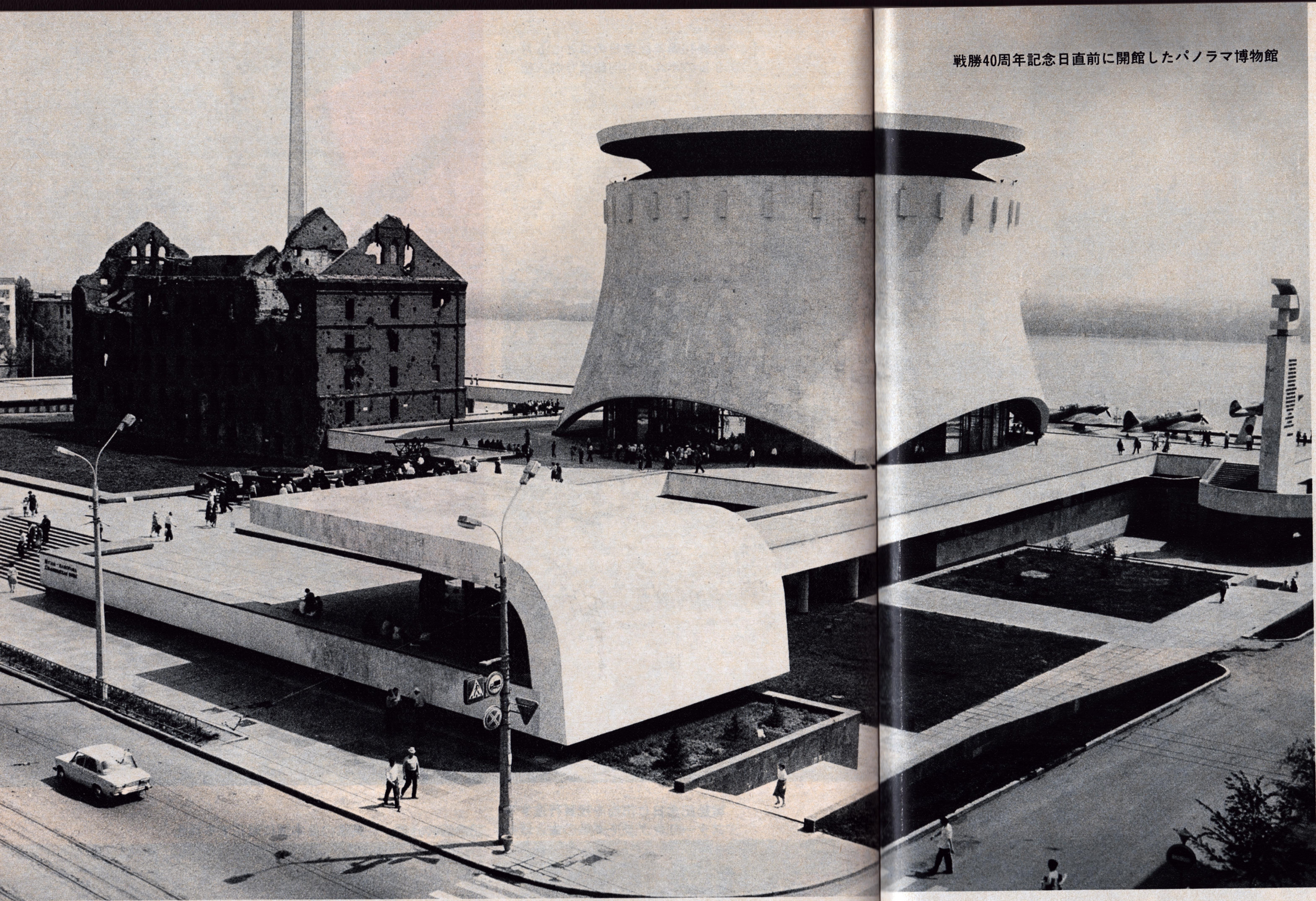
右中　第1次世界大戦と国内戦のときに船の消火に活躍した消防船

右下　一九八五年5月9日22時、この高射砲から戦勝記念日の祝砲が発射された。

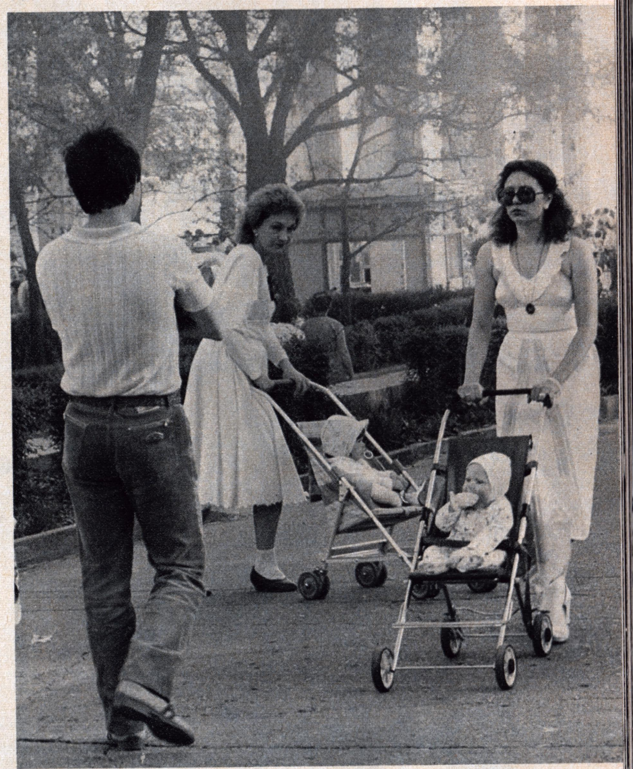
上　パノラマ博物館横の兵器展示場のT34型戦車

左　この少女たちがいつまでも平和に暮らせますように。

戦勝40周年記念日直前に開館したパノラマ博物館



青葉かおる５月の晴れた日には散歩がなにより。



人々を追悼する碑を建てた。生き残った人々、その子や孫たちは、ミナエフ中尉や彼の何千という戦友たちが思いえがいた夢を実現した。

一九四三年春のスターリングラードは、一面の廃虚で、およそ都市の面影などはどこにもなかった。総面積一五〇万平方mの四万一六八五棟の住宅、つまり全住宅の85％が破壊され、炎上していたし、上下水道、交通網、ほとんど全部の学校、病院、図書館、博物館が破壊されていた。市内の工場は事実上一つも残らなかった。スターリングラードの物質的損害は総額九〇億ルーブルにのぼった。ボルガ河畔の戦闘が始まるとすぐに市民の大半は無事疎開したが、それでも四万人の一般住民が死んだ。

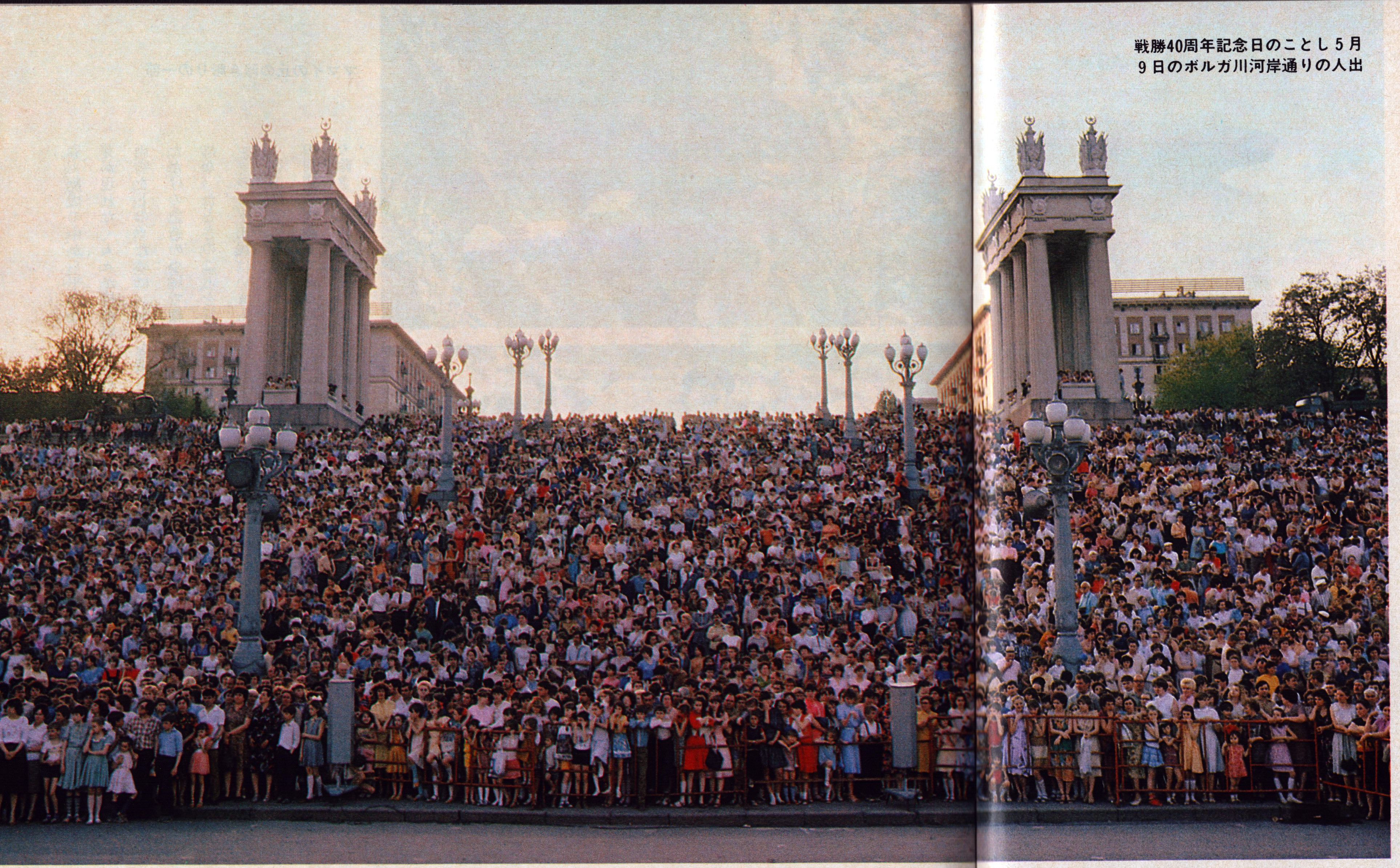
まだ戦争は続いていたが、何をさておいても工業、公営事業、住宅を復興しなければならなかった。一九四三年

パノラマ博物館にはスターリングラード戦を物語る3000余りの展示物がある。



パノラマ博物館の内部





戦勝40周年記念日のことし5月
9日のボルガ川河岸通りの人出



ママエフの丘は市で一番高い。一九六〇年代にここにスターリングラード戦の英雄たちを追悼する壮大な記念館がつくられた。圧巻は「母なる祖国」の彫像である。

永遠の火が燃えるママイの丘の戦死者合祀廟（パンテオン）



戦勝記念日に市街を祝賀行進する
スターリングラード戦の生き残り



記念館の一部――英雄の並木道に献花する兵士





ママイの丘の浮き彫りの一部

春、廃虚の中から平和な生活の最初の芽が現れた。人々が掩蔽壕、退避壕や雨雪をしのぐためにレンガを積み上げただけの急造の小屋で細々暮らすようになったときのことを覚えているボルゴグラード市民はいまも多い。

復旧作業に取りかかる前に、市とその周辺に埋設してある地雷を急いで取り除き、死体や不発弾などを処理しなければならなかった。

この作業の規模なり、困難や危険の度合いなりはすぐにはピンとこないかもしれないが、スターリングラード戦のあとこの地区全体で敵兵の死体一四万七〇〇〇体、戦死したソビエト将兵四万六〇〇〇体、動物の死体一万一〇〇〇体以上が片付けられ、葬られたことから、およそ察しがつこう。



戦勝記念日に顔を合わせた３世代の軍人。左の老人の胸には国内戦（1918—22年）参加の勲章も輝いている。

スターリングラード防衛の指揮官の一人ワシリー・チュイコフ元帥（1900—1982）はママイの丘に葬られている。墓には花が絶えない。



地雷を除去し、不発弾を処理する作業は、非常に手間がかかり、3年もかかった。一三万五〇〇〇haの土地で一五五万二〇五五個の爆発物（うち三八万二六一二個は対戦車、対歩兵地雷）が発見、処理された。地雷除去作業中30名の工兵が死傷した。地下に埋まった爆発物は多く、40数年を経たいまでも時々発見されているほどである。

破壊されたまちで日常生活を営むのはなかなか大変なことだった。水も、電気も、住居もなく、製パン所も商店も開いていなかった。だが人々は屈しなかった。

チェルカーソワの運動

一九四三年夏、幼稚園の保母で、戦死した兵士のアレクサンドル・チェルカーソフの未亡人は、「パブロフの家」（この家は防衛したヤコフ・パブロフ軍曹の名がつけられており、市の歴史に残っている）を手のすいたとき友人と一緒に無料で復旧したいと申し出た。チェルカーソワの申し出は市民たちから熱烈に支持された。申し出のあった1週間後には六〇〇〇人が復旧作業に出動し、さらにその翌日には一万人以上に増えた。毎日の仕事が終ったあと人々は通りに出て、廃虚を取り片付け、木を植えた。チェルカーソワが音頭をとった運動は、やがて占領下から解放されたソ連の他の都市にも波及し、何百万というソビエト人から支持された。ボルゴグラードの復興、整理に大きく貢献したのは、こうした志願建設隊であった。

真っ直ぐボルガ川に通じるチュイコフ元帥通りのアパートで、私はいまアレクサンドラ・チェルカーソワさんと向かい合っている。かつてこの狭い土地を守ったのは、チュイコフ元帥ひきいる第62軍の兵士だった。いまここは美しい河岸通りになっている。

チェルカーソワさんは昔を振り返って上気した顔で、シガレット・ホルダーに次々とタバコをさし込む。こんな強いタバコを吸うのは主に戦中派の人々であり、私もすすめられたが、ことわった。

「このアパートの部屋を市ソビエトから割り当てられ、初めて部屋に入ったとき、ひとりでに涙がこみ上げてきましたね。窓にきらきら日が当たって……それまでは壕舎の狭いすきまや戦時中と戦後の数年間を暮らしたバラックの小窓から日ざしがわずかに漏れる程度だったんですからね。わが国には当時そんな暮らしの家庭が数え切れない位あったんです。私たちはいつもあのころを思い出して、現在のありがたさをしみじみ感じとらねばなりませんね」

将来のプラン

現在のボルゴグラードを語るさい忘れてならないのは、今のまちがとほうもないひどい状態からスタートしたことである。数年後に市の創立四〇〇周年を迎えるボルゴグラードには、40年以上たった建物は事実上ない。

都市建設者たちは市の区画構成を全面的に変えて、前よりも整然かつ便利なものにした。街路と大通りは広くなり、木が沢山植えられ、アパートは住み心地がぐんとよくなった。ボルガ川沿い80kmにわたって延びる昔からのまちの輪郭はそのまま残されて、四つの大住宅地区がつくられ、これらの地区の間には緑地帯が設けられた。四つの住宅地区はそれぞれが完全な都市機能をもち、そこでは市民の職場、住宅、休息のバランスがよくとれている。

いまボルゴグラードの人口は戦前の2倍余りの九七万人で、住宅の総面積は戦前に比べて4倍に増えた。現在のボルゴグラードはソ連の大工業中心地であり、一連の最重要工業部門のソ連全体の生産で上位を占めている。市の企業はトラクター、石油・ガス産業設備、川海兼用型船舶、医療設備、ワイヤ、消費財を生産している。

一九八四年には二〇〇〇年までの市の発展の新しいマスタープランが採択された。二〇〇〇年までに市の人口は一三〇万人になると見られる。住宅と文化・生活サービス施設の建設規模の増大や企業の改装・近代化、環境保全対策などを考慮に入れると、残った15年間に戦後40年の2倍の量の建設をやらねばならないことになる。

←



市の中心部の広場の一つに立つ若い防衛戦士の碑



市の公園は学生たちに愛される憩いの場



ウクライナの建設工たちが市に贈った子供用品店「マルィシ」



▲市の中心街の一つ――レーニン通り



喫茶・菓子店「ルーシ」はケーキがおいしいので有名だ。



駅前広場



ボルゴグラードには船員志望の子供が多く、少年船員クラブは人気の的。

ボルゴグラードの子供たち

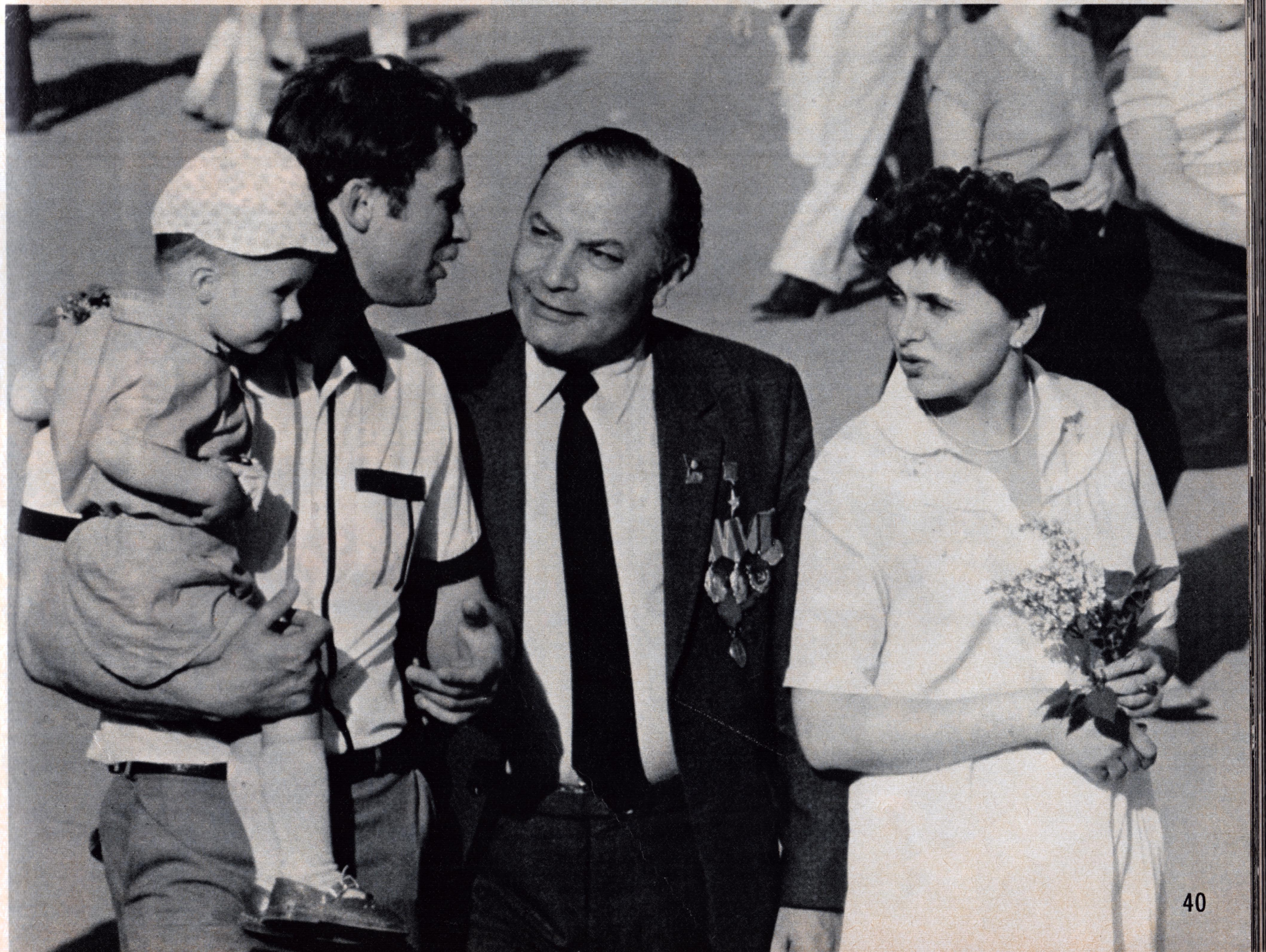






1975年にボルゴグラード市ソビエト代表団の一員として「赤い10月」製鋼所の工員アレクサンドル・ボズニャコフは広島を訪れた。この２枚の写真はその時のもの。

戦勝40周年記念日の５月９日、「赤い10月」製鋼所の工員Ａ・ボズニャコフは街頭で息子の一家と合流した。



死者の追悼

破壊され復旧したソ連の諸都市は、多くの点で似かよっている。いずれも古い建築物はなく、建物はごく短期間に新しく建設されたものばかりだ。しかしボルゴグラードには一つ特徴がある。いたるところに墓があることだ。その墓は戦没兵士の中央広場やにぎやかなレーニン通り、ママイの丘やソルダツキー（兵士）と名づけられた原っぱにあり、名が刻まれている墓もあれば、無名の墓もある。

　こうした沢山の碑や墓は、ここで一つの通り、一軒の家をめぐって流血の戦いが行われたことや、対ファシズム戦の転換点となったスターリングラード戦の勝利が、沢山の犠牲を出してあがなわれたものであることを、人々に思い出させる。

　あれ以来40年の年月が流れたが、その思い出はいまも人々の胸に生きている。忘れ去るには、損失は余りにも重く、破壊は余りにも大きかったのだ。

　いまママイの丘の記念館は、大勢の人が訪れる聖地となっている。スターリングラード戦のときこの瞰制高地を占領するために激戦が展開された。この伝説的な丘の東の斜面全部はいま壮大な記念館になっている。ソ連の有名な彫刻家エブゲニー・ブチェチチは六〇年代にソビエト兵のヒロイズムをたたえる石のポエムというべきものを制作した。

　対ヒトラー・ドイツ戦勝40周年の直前、もう一つメモリアル・パノラマ博物館「スターリングラード戦」が開館した。この館はかつてスターリングラード戦に参加し、その後市の建築技師長をしたことのある建築学教授のＶ・マスリャエフを中心とする建築家グループが設計したもので、ボルガ川の岸辺に面し、岸からパノラマ館まで花崗岩の階段が通じている。美しく内装したホールには、スターリングラード戦の経過を物語る兵器、文書、地図、写真など三〇〇〇点余りが展示されており、この二〇〇昼夜の戦闘の「記憶の保管所」とも言うべき存在になっている。

　20年前からママイの丘のふもとの公

市の中心からこの階段を下りると、すぐにボルガ川に出る。



「赤い10月」製鋼所の工員ウラジーミル・ハルチェンコフはスターリングラード戦に参加したが、今も製鋼所で働いている。戦勝記念日には仲間の工員と「戦死した工員の壁」に献花した。











数年前広島を訪れた「赤い10月」製鋼所のもう一人の工員ウラジーミル・ハルチェンコフの脳裏にも温かい歓迎、楽しかった懇談の印象が深く刻まれている。そのときの写真はよい思い出をよみがえらせてくれる。



ボルガ川の3層甲板の遊覧船
ドミトリー・ドンスコイ号

園に、戦死者を追悼して植林するしきたりができ、トラクター工場の女子工員リジア・プラスチコワが亡き夫を追悼して最初の木のクワ入れを行った。いま公園には二万本の木が植えられており、友好の並木道もある。この木の多くは広島の代表をはじめ、姉妹都市の代表たちが植えたものである。

平和運動家の先頭に立って

ボルゴグラード市民は戦後最初に復旧（実際は新設）した通りを平和通り（ミール）と名付けた。4年間にわたるたえまない苦難と窮乏を乗りこえて、すべての人が平和という言葉を口にした。そのとき以来平和を願う気持ちは弱まるどころか、かえって強まった。いまどの企業、機関、学校にも平和運動家グループがある。核兵器が出現して以来ボルゴグラード市民は核兵器の全面完全禁止と廃絶を要求している。

広島とボルゴグラードがそれぞれの国民にとって意味するものには、共通するところが多い。だから両市は姉妹都市になっているのだ。毎年スターリングラード戦の生き残りがボルゴグラードにやってきているし、戦争を知らない世代もやってきて、死者を追悼している。外国からも大勢の客が来て、戦没者の碑に献花している。日本の〝不戦の誓い〟運動の参加者たちも一度ならずボルゴグラードを訪れて、ソ連の平和運動家たちと一緒に、スターリングラードや広島の惨事を繰り返さないよう全力を尽くすことを誓った。ボルゴグラードの使節たちはどの都市の反戦集会に出ても、必ず嵐のような拍手に迎えられている。

国際情勢が著しく悪化しているいま、反戦運動はとくに大きく盛り上がっている。いま数万のボルゴグラード市民は、新しい戦争の脅威に抗議して、さまざまな集会やデモ行進に参加している。彼らはワシントンの宇宙軍事化計画を強く非難し、全世界の世論にジュネーブのソ米交渉の成功を側面から後押ししてほしいと呼びかけている。

クラースヌイ・オクチャブリ（赤い10月）製鋼所の工員アレクサンドル・ポズニャコフは、これまでなんどかデモ行進に参加してきており、次のように語った。

「私はごく普通の労働者で、平和と家族や子供の幸せのほかは、別に何もいらない。平和運動に参加して、私は自分の一番大事なものを守っている。しかし反戦闘争は一国、一国民だけではだめで、平和と軍縮をめざす共同行動が必要である。ほかの国の一般の人々も同じ考えだろう。私は10年前ボルゴグラード市ソビエト代表団の一員として広島を訪れたが、そのときそう確信した。日本の人々と話し合って、非人道的な核兵器はどんなことがあっても使ってはならないということで、一致した。新しい、先のものよりももっと恐ろしいヒロシマは、われわれ皆の死、全人類の死を意味するだろう。諸国民は団結して核による死にたち向かわねばならない」

ボルゴグラードは姉妹都市運動のパイオニアであり、広島のほかに、コベントリー（英国）、ジジョン（フランス）、リエージュ（ベルギー）、マドラス（インド）、ポートサイド（エジプト・アラブ共和国）などと友好関係を結んでいる。

ウラジーミル・アトポフ・ボルゴグラード市執行委員会議長（市長）は広島との関係について次のように語った。

「ことしボルゴグラードと広島は姉妹関係締結17周年を迎える。昨年荒木広島市長がボルゴグラードに来られて、両市の交流に一段とはずみがついた。共同コミュニケにうたったように、両市はこんごともソ日両国民間の平和と友好や核の脅威の除去のために力を合わせるつもりである。

われわれは都市建設や環境保全、市民の余暇と休息などの都市の発展のさまざまなさし迫った問題について、意見や経験を交換し合っているが、いま差し当たっての主要課題は、平和擁護活動を活発にし、共同の反核行動の結びつきをさらに安定させ、強化することだと考えている。だからわれわれは、広島被爆40周年、反核闘争問題の戦災都市市長会議を広島で開く構想を高く評価している。この会議にはボルゴグラードからも代表団が参加するだろう。ボルゴグラード市民は核による死を防止できると信じている」

ボルゴグラードを訪れて

——ヒロシマ・ダンサーズの中高生の感想

ことしの3月、広島市の創作舞踊集団ヒロシマ・ダンサーズ（古月公子さん主宰）の一行が姉妹都市ボルゴグラードを訪れ、『ノー・モア・ヒロシマズ——星ひとつまたたきて』を上演した（66ページ参照）。この一行には中学生と高校生も加わっていた。本誌ではその5人の中高生に、広島と同じように戦争の大きな悲劇を体験した都市ボルゴグラードの印象を聞いた。



ヒロシマ・ダンサーズの皆さん。最前列右から楠本さん、木梨さん、一人おいて山本さん、吉田さん。最後列左から2人目が銭広さん。

楠本　富美さん（中学2年）

私はこの公演旅行を通して、多くのことを感じ、学びました。ボルゴグラードには広島の原爆ドームに似た、戦争で破壊された建物が残っていて、ここでも広島と同じように恐ろしいことがあったのだなと感じました。

ボルゴグラードで私たちの公演を見に来て下さった観客の数、拍手の大きさに圧倒されました。上演中、観客の人達は一言もしゃべらず、ある場面では涙を流した人もいると聞きました。そして、最後のカーテンコールの、温かい拍手を忘れることはないでしょう。

木梨　一枝さん（中学2年）

ボルゴグラードに行ってみて、広島といっしょで、同じように空襲で町を焼かれ、戦争の傷あとがまだ残っていることがわかり、戦争反対、反核の気持ちがまたあらたに生まれてきました。

ボルゴグラードでは初日だったこともあって、とても緊張しましたが、平和を願い、精一杯踊りました。この公演に参加させてもらい、二度と戦争をしてはいけないということを強く思いました。

山本　やよいさん（中学2年）

「星ひとつまたたきて」をソ連で公演できて、とてもよい勉強になったと思います。初日はボルゴグラードでした。とても緊張しましたが、一生懸命頑張りました。一幕終わるごとに、観客の方々が大きな温かな拍手を下さいました。最後のカーテンコールでは、また、大きな拍手を下さいました。どこかで、「ハラショー、ハラショー」（すばらしい）という観客の声も聞こえました。私は感激のあまり涙が出そうでした。

ボルゴグラードは広島と同じように戦争で大きな苦しみを受けた町です。戦争で倒れた人たちに捧げられたママイの丘の記念碑が印象的でした。ボルゴグラードの子供たちとは、離れているけれど、力を合わせて反核の輪を広げたいと思います。

吉田　亜矢子さん（中学1年）

ボルゴグラードには、広島の原爆ドームのような建物があって、戦争の時の悲惨さがうかがえました。また、記念館のパノラマなどを見て、戦争が非常に残酷なものだということをあらためて感じました。今の私たちは豊かで幸福な生活をしていますが、昔の人たちが戦争で大変苦しい経験をしたということを忘れないようにしたいと思います。

銭広　美里さん（高校2年）

ボルゴグラードでは第2次世界大戦中の激戦の模様を伝えるパノラマを見ましたが、その模型は非常にリアルなものでした。これは、ソビエトの人たちみんなが、戦争のときの苦しみを決して忘れまいとしていることと関係があるのではないかと思いました。ママイの丘の記念碑も壮大なもので、強く訴えるものがありました。

ボルゴグラードの公演は満員で、すごい拍手でした。いま日本とソ連は仲が悪いと思われていて、行くまでは私もそう思っていましたが、現地ではそんな感じは全然しませんでした。戦争が二度と起こらないようにお互いに努力しましょう。

世界中の言葉で歌う

——モスクワの民族音楽アンサンブル



盛り上がる民族音楽アンサンブルの舞台



▲ウェスタンの『急行列車』を演奏するタマーラ・シドロワとコンスタンチン・クジャリエフ。



リトワ共和国（バルト海沿岸）のユーモラスな曲の演奏



ソリストのイリーナ・グーシチェワはモスクワ外国語教育大学の卒業生。さまざまな民族の歌を原語でうたっている。

世界中の言葉で歌う

ウラジーミル・ナザロフが率いるモスクワの民族音楽アンサンブルの演奏者は17人だが、彼らが演奏する民族楽器は、アフリカ、欧州、ラテンアメリカ、それにロシア人をはじめとするソ連のほとんど全部の民族のものなど約一五〇種類にものぼる。

このアンサンブルの名前が広く知れわたったのは、2年前の全ソ・バラエティーショー・コンクールで1位になってから。このときの出しものは『世界中の言葉で恋を歌う』だった。それいらい今日まで国内での公演は数千回に達し、外国へも数十回公演旅行に出かけた。このアンサンブルのレパートリーには、情熱的な『ブラジルのサンバ』もあれば、ゆったりとしたグルジアの歌『サブダグレイ』もあれば、茶目っ気たっぷりなチロルの歌『わたしが小鳥であったなら』もあるといった具合いで、曲目は実にバラエティーに富んでいる。

アンサンブルのメンバーが次々とちがう歌を演奏する軽妙さにはただただ驚くばかり。たとえば、コンスタンチン・クジャリエフはギターを抱えた情熱的なジプシー男から、バンジョーですばらしい一節を弾き出す米国の農村の若い衆に変わり、さらにその数分後にはチャランゴで物憂いペルーのメロディーを奏でる夢多き山の男になる。タマーラ・シドロワはバイオリンの名手だが、バイオリンを手離すと、いたずらっぽい踊り女になってしまう。

アンサンブルのメンバーのなかには、かつてのジャズメンもいれば、クラシックの演奏家も、ロックの信者だった音楽家もいる。プロの音楽家ではなくただ民族音楽が好きで、アンサンブルのメンバーになった者もいる。

団員たちは公演旅行へ出る度に、いろいろな土地で新しい民謡の歌詞やメロディーを採録し、新しい民族楽器を見つけ出し、本当の探求者に特有の粘り強さと情熱で演奏法をマスターする。それから、語学練習室で長時間にわたるリハーサルをする。民謡はすべて原語で歌われる。舞台で上演されるときは、軽妙で、なんでもないように見えるが、その演奏の陰には血の出るような、たいへんな精進が隠されているのである。

指揮者のウラジーミル・ナザロフは語る。

「新しい公演旅行へ出る度に、世界の民族音楽が実に豊かであり実に多様だという確信を新たにする。いま、われわれのアンサンブルで計画しているのは、スカンジナビアと東南アジアの諸民族の民族音楽文化の研究だ。

芸術は人々をひとつに結びつけるのが使命。われわれがモスクワの第12回世界青年学生祭に出演しないかという申し出に喜んで応じたのも、そのためだ。歌声が高らかに響きわたっているところには、敵意や憎しみの生まれる余地はない。そこで勝利するのは平和と友好なのだ」

合同漁業委員会の第1回会議

さる5月12日付のソ日漁業協力協定に基づいて設けられたソ日合同漁業委員会の初会議が、5月13日から6月4日までモスクワで開かれた。

ソ連側の代表団長はビャチェスラフ・ジラーノフ・ソ連漁業省渉外局長、日本側代表団長は中島圭一・水産庁海洋漁業部長であった。

会議では北西太平洋の漁業資源の保存・再生産・管理に関する協力、さまざまな漁業分野における研究の実施と経験の交換などの幅広い問題が討議された。

委員会は、北西太平洋の生物資源の海洋調査研究のための科学研究機関、現業機関間の協力の拡大・深化、漁業資源の加工技術および北西太平洋のサケ・マス漁の監視に関する今後の措置を定めた。

日本側の一九八五年6—7月のソ連を母川国とするサケ・マスの漁獲量は三万七六〇〇t以内と定められ、同時に日本側はサケ・マス資源の保存に関する規則と操業規制措置を順守することとなった。

さらに一九八五年9月にハバロフスクで、北西太平洋におけるサケ・マス資源の状態とその操業水域の問題を検討する両国の漁業分野の学者・専門家の会議を開くことが決まった。

双方の代表団長は会議の結果に関する議事録に調印した。議事録には漁業分野の両国の科学技術・工業協力の成果、サケ・マス漁の規制措置が反映されており、また当面および将来の漁業協力の発展の基本方向が定められている。



ソ日合同漁業委員会第1回会議の結果に関する議事録に調印する中島水産庁海洋漁業部長（左）とジラーノフ・ソ連漁業省渉外局長（一九八五年6月4日、モスクワ）

サケ・マス資源を増やすために

——法的立場から見て

ソ連漁業省条約・法律部長
ウラジーミル・イクリャンニコフ

国連海洋法条約（一五〇カ国以上が調印）の採択に伴って、世界の海洋における新しい法秩序が確立され、ソ日漁業関係も変更する必要が出てきた。またそれはソ連が法令「ソ連の経済水域について」（条文は国連海洋法条約に準拠）を採択したことからも、必要になった。

こうして約1年間、新しい法律に合わせてソ日関係の法的な枠を組み替える作業が行われてきた。

双方が相互理解と協力の発展、深化を願う熱意、さらに英知と政治的意思を示した結果、ソ日地先沖合漁業協定（一九八四年12月7日調印）とソ日漁業協力協定（一九八五年5月12日調印）の二つの政府間協定が結ばれた。

前者は、平等と互恵の原則に基づく二〇〇カイリ水域内の操業問題におけるソ日長期関係の基盤となるものであり、後者は北西太平洋のサケ・マス漁業、漁獲と魚の加工、漁業資源の再生産、栽培漁業などでの両国間の協力の発展と深化を促進するという課題を提起している。

これらの問題のほか、ソ日漁業協力協定は国連海洋法条約に基づいて公海の二〇〇カイリ水域外での外国漁船によるサケ・マス漁獲問題やサケ・マス資源の利用と関連した一連の他の問題を解決した。

周知のように、遠くない過去においては、サケ・マス資源の保存・再生産に対するソ連の寄与と、公海での日本側のサケ・マス漁の性格、規模との間に一定の不釣り合いが見られた。

新協定の基礎になっているのは、国連海洋法条約で認証された、母川国のサケ・マス資源に対する第一義的な利害関係と責任である。この原則の実際の適用は、あれこれの水域の法的地位いかんにかかっている。

たとえばサケ・マスの母川国は二〇〇カイリ水域外の公海での外国漁船の操業規制措置を定める権利をもっている。外国漁船の操業を禁止すると、その外国の経済に混乱をもたらしかねない場合にだけ協定に基づいて操業が許可される。

サケ・マスがどこかの国の領海または二〇〇カイリ水域内に生息している場合には、この国はこれらの資源の保存と管理で母川国と協力する義務を負う。これらの規定に基づき、ソ日両国は、公海における操業手続きと操業条件を、母川国としてのソ連のサケ・マス資源の保存に関する要求とサケ・マス資源に対する需要をしかるべく考慮に入れて決定する協定を結んだ。その際日本は、法律用語を使うなら、ソ連系サケ・マスの再生産に参加する場合に——特にこの目的のための支出に参加することによって——特別の配慮を受ける。

協定によって規定された問題を解決するために、ソ日合同漁業委員会が設けられた。同委員会はすでに5月13日—6月4日にモスクワで第1回会議を開いたが、その会議の結果については前の記事を参照されたい。

サケ・マス資源状態を評価し、その保存措置をとることが母川国に課せられているので、ソ連は今年初めてソ連の極東河川で生まれるサケ・マスに関する規則を採択した。この規則を定める決定的要因となったのは、事実上ソ連のすべての河川の産卵場の充満度が最適充満度の数分の一であるという事情である。その原因が日本の漁船の操業によるものであることは隠れもない事実である。一九八二年に北大西洋諸国は国連海洋法条約に基づいて、これらの国の二〇〇カイリ水域でさえサケ・マス漁を禁止する新しい条約に調印した。その結果、デンマーク、西独、その他一連の国の漁民はサケ・マス漁を中止したのである。

北太平洋に同様の規定を設けるために、ある種の合理的な移行期が必要であることは理解できるが、しかしサケ・マス漁に利害関係を持つすべての国によって承認された新しい法秩序の要求を無視することはそれ以上に容認できない。

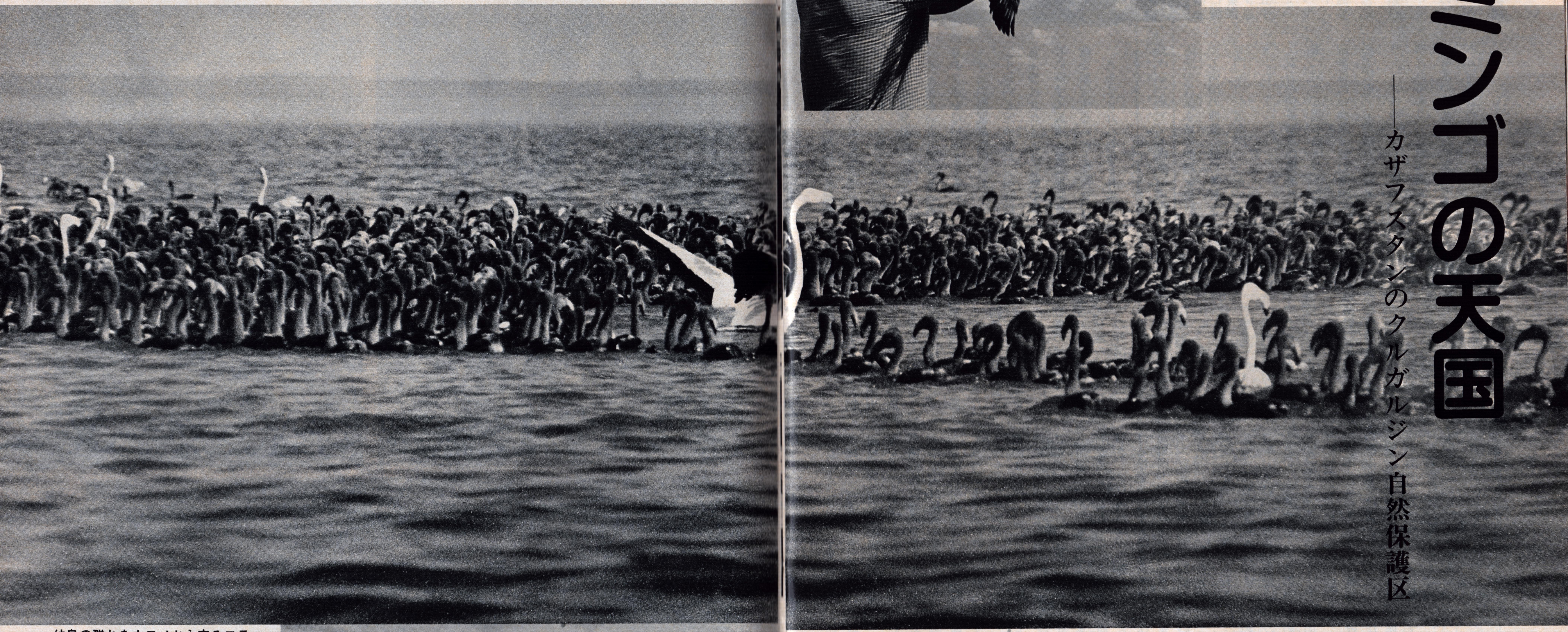
人間と自然

フラミンゴの天国

——カザフスタンのクルガルジン自然保護区



◀フラミンゴに標識環をつけるクルガルジン自然保護区の鳥学者



カメラ　E・シレイ
　　　　A・パフスキー

カザフ共和国の中央部に広がるクルガルジン自然保護区は面積一九万三五三八ha。そのうちの一五万五六〇〇haがテンギス湖を中心とする水面である。この地域の気候は極めて大陸的で、気温は夏にはプラス40度C、冬にはマイナス40度C以下にも達する。

この自然保護区の環境は非常にユニークで、広大な水面と広大なアシ原が複雑に入り組み、細い流れや水たまりが迷路のように走っている。ときどきアシの茂みに隣り合って植物がほとんど生えていない陸地が出現する。このあたりでは森林はまったく見られず、テンギス湖の周辺に高さ3mほどのギョリュウが生えているだけである。

自然保護区内には約二五〇種の鳥が住んでいる。ここではクロヅル、アネハヅル、カモメ属、ヌマライチョウ、ペリカン属など、北方系の鳥も南方系の鳥も見ることができる。

しかし、ここの自慢のタネは何といってもベニイロフラミンゴだろう。フラミンゴはこの自然保護区でも浅いテンギス湖だけで営巣する。ここのフラミンゴのコロニーについては、昔の古写本やカザフ人の言い伝えにも出てくる。現在その数は六〇〇〇羽に達し、わが国で営巣するフラミンゴの最大のコロニーを形成している。

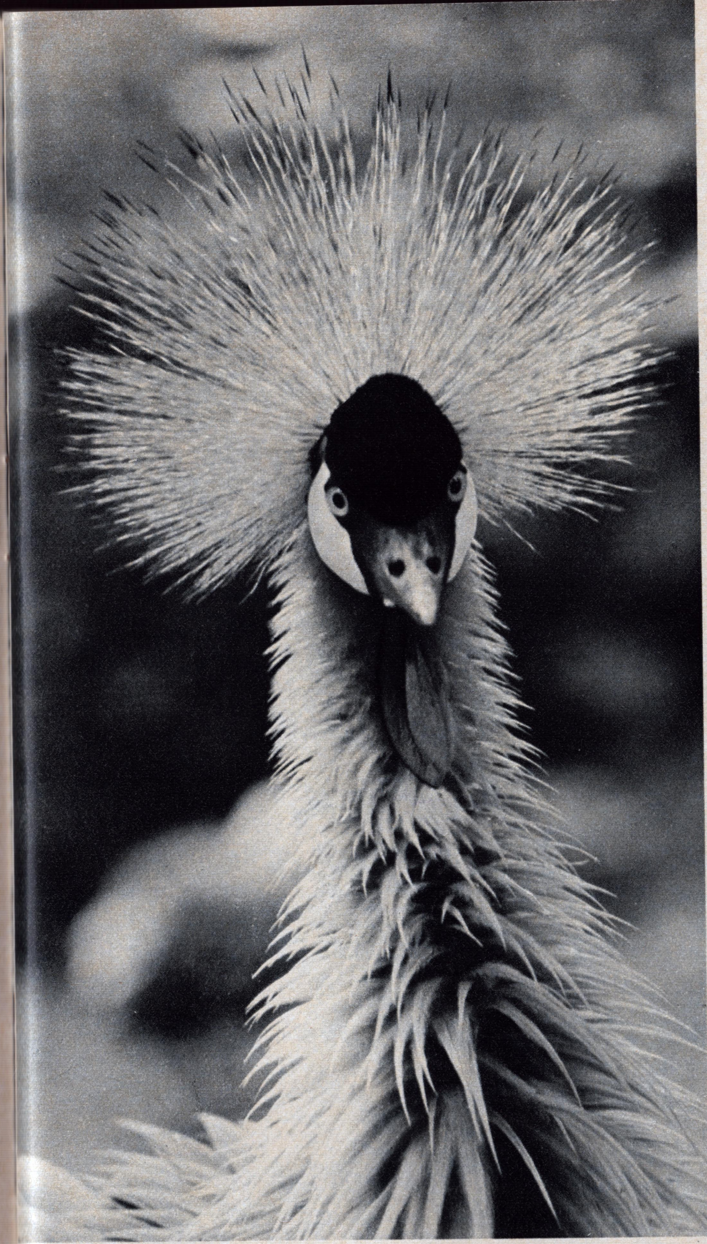
系統的な標識調査の結果、ベニイロフラミンゴの越冬場所が明らかになった。ベニイロフラミンゴの生息域はインドからチュニジアまでの広範囲に及ぶ。なぜテンギス湖へやってくるのだろう？　学者たちはこの湖の水に溶けている塩分の組成に理由があると考えている。ここの水には1ℓ当たり250gの塩分が含まれており、これがフラミンゴの好物で主要な餌である特殊な小エビが生きるための好条件を作り出しているのである。

クルガルジン・ステップとその湖沼群は国家の保護のもとに置かれている。近くには鉄道もなければ自動車道もなく、航空路さえ迂回しているので、ここでは鳥たちを脅かすものは何もない。

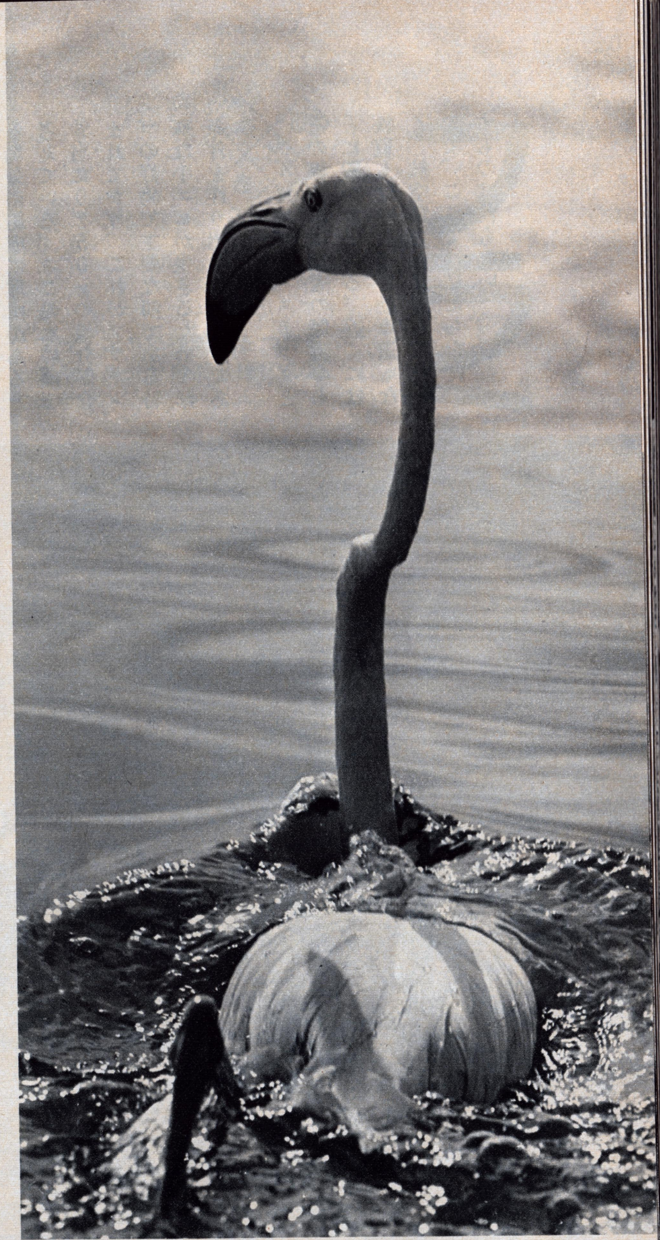
幼鳥の群れをカモメから守るフラミンゴの親鳥



▶パトロールする監視官



▶ソ連に住むツルの仲間のうちで最も美しいアネハヅル



ベニイロフラミンゴ



浅瀬で採餌するシギ



テンギス湖の日没

ソ連の視点

社会主義と平和は不可分

ノーボスチ通信政治評論員 E・チェポロフ

国際世論はソ連で始まっている経済再編プロセスをソ連だけの純国内的な現象とは決して見ていない。ソ連国内の出来事は、評価もさることながら、その国際情勢への影響という観点からとらえられるのがつねだ。それも当然で、一国の国内政策と対外政策方針とをはっきり分ける垣根などありえないのだ。

それではソ連が社会・経済発展の新段階に突入するにあたって、いったい国際社会にどのような〝信号〟を送っているのだろう？ さきごろの科学技術進歩促進問題に関する会議でのゴルバチョフ報告は、根本的変革に対するモスクワの〝不退転の決意〟、経済情勢批判にあたってのソ連指導部の〝きわめて率直な態度〟を示すものと評されている。このようにして社会主義はその創造力と力強さを改めて立証している。これほど壮大な課題に取り組もうとしている国が、これまで同様自国民と地球全体の平和な未来を守ることを意図しているのは明らかだ。

ソ連共産党中央委員会の科学技術進歩促進問題に関する会議では、ソ連は今や経済の集約的発展軌道への移行と、経済機構全体の計画化および管理の根本的再編が急務となった段階に達した、と指摘された。ロイター電によると、西側専門家筋は、新5カ年計画で実施される戦略はソ連経済をさらに効率的なものにすることだと見ている。社会・経済発展の促進は単に国民経済の成長率を引き上げることではない。問題は、発展の新たな質、重要戦略方向でのすみやかな前進、生産の機構改造なのだ。

集約化への転換、生産効率の引き上げを実現するために生産力と全管理機構の根本的変革が必要で、各経済部門が次々に大規模な経済実験に参加している。われわれは科学技術進歩での革命的前進——技術体系に最高の効率を保障する全く新しい前進をめざし、全部門の技術更新をめざしている。新たに重視されているのが、社会の要求をより完全に充足する唯一の確実な道としての製品の質の向上である。

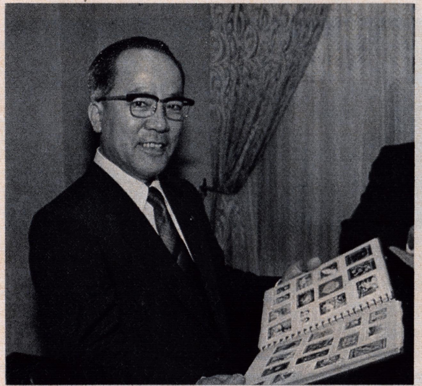
今回の社会・経済発展促進綱領は、ソ連が平和の理念を守ろうとしていることを裏づける、きわめて重みのある論拠の一つで、〝ソ連の脅威〟とやらで世界を震えあがらそうと企てている連中との論争でもきわめて強力な論拠の一つとなる。というのも、計画された経済改造の実施はゆるぎない平和のもとで初めて可能だということははっきりしているからだ。

外国の新聞は、ソ連で予定されている改造は西側諸国との経済交流の拡大を促す、と論評している。これにもう一つつけ加えたいのは、わが国の経済改造は、言うまでもなく、〝冷戦〟の雰囲気の中ではなくデタントのもとで一層急速に、一層効果的に実現するということだ。そのデタントは、そのよさを西側に立証し、幾百万もの人々に、社会体制の異なる国々が対等協力にもとづいて互恵関係を築くことができることを納得させた実績がある。このように、モスクワの経済戦略の現段階は、わが国の平和共存理念への忠実ぶりを再確認するものだ。

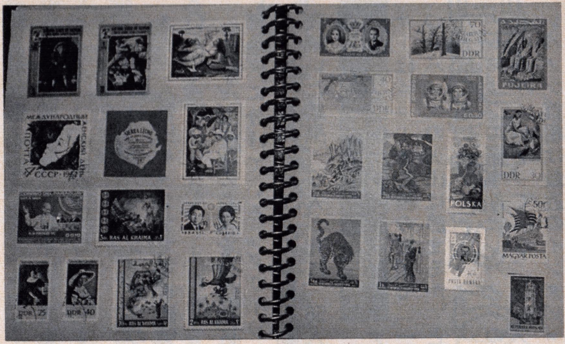
しかし経済の集約化と先進技術の導入は、また、外部情勢によって求められ、軍事出費の必要にうながされたものである。われわれはできることならわれわれの資源をすべて平和的な用途にふりむけたいと望んでいることは確かだ。しかしわれわれが〝反社会主義十字軍〟に脅かされ、ミサイルの的にさらされており、〝スターウォーズ〟の準備が進んでいる間は、国防に必要な資金をつぎこまざるを得ない。これらの計画の立案者たちは、周知の通り、わが国の経済を弱体化することを狙っている。だが西側でどんなにソ連経済を軍拡競争によって破壊しようとしても成功しないだろう、と英ガーディアン紙は書いている。現在提唱されている措置の結果、ソ連経済はさらに強力になることは間違いない、と。

ソ連は発展の新段階に突入する一方、資本主義諸国との競争を続けている。われわれは次から次へと新しい殺人兵器を開発する分野ではなく、経済や科学技術の分野で競争する立場を改めて示した。われわれは誰にも自分の世界観や生活様式を押しつけるつもりはない。ソ連国民に必要なのは、社会主義社会の創造的建設と一層の改善のための平和だ。われわれの理想は、全面完全軍縮、公正な恒久平和だ。平和の維持は社会主義社会の性格そのものに由来する。社会主義と平和は切りはなせないのだ。

一家が集めた切手コレクションをソ連へプレゼント



◀ソ連へ寄贈する切手アルバムを手にした山田さん



山田さん一家が収集した切手の一部

このほど、東京・板橋区に住む山田尚己さん（57歳）から、山田さん本人と故人のお父さん、お父さんの叔父さんの三人が明治時代末から75年間にわたって収集してきた世界の珍しい切手四〇〇〇点と名所スタンプ入りのアルバム7点を駐日ソ連大使館を通じてソ連に寄贈したいとの申し出があり、関係者を喜ばせている。山田さんは次のような手紙を切手に添えた。

「昨年はじめ初めて貴国を訪れました。イルクーツク市で社会主義労働英雄の老労働者と会って、日ソの不戦を誓い合い、固い握手を交わしました。

この出会いを記念し、また亡くなった私の身内の者たちの希望を伝えるために、平和のシンボルとして、私たちのコレクションを寄贈したいと思います。このささやかなプレゼントを受け取って頂ければ、とても幸せです」

播州地方の訪船活動

日ソ協会兵庫県連 岩城 隆夫

私たちは日ソ協会兵庫県連の方針の一環として、毎月必ず一度は姫路港でソ連船員と交流を深めています。

このたびは会員10名で5月14日の夕方から〝カムチャツキー・コムソモーレツ〟号を訪船しました。

まずソ連を紹介する映画を見せてもらってから、二階の応接食堂へ案内され、紅茶とハム、焼きたての白パン、黒パンをごちそうになり、たどたどしいロシア語と日本語で楽しい会話に花が咲きました。そのあと日ソ合計30名余りが歌や踊りで交歓し、最後に航海の安全を祈り、平和を誓い合って船を辞しました。タラップをおりる時、船員さんたちが大勢甲板に並んで手をふっていたのが印象的でした。

播州地方の楽しい訪船活動はますます充実している様に思います。私はロシア人と文通している一人です。

謹告

日ソ協会大阪府支部連合会、同兵庫県連合会、同京都府連合会からノーボスチ通信社東京支局を通じて、本誌編集部に要旨次のような申し入れがありましたので、掲載します（編集部）。

《「今日のソ連邦」本年6月15日号53ページに掲載されている「大阪で本誌読者会」の記事中に、「日ソ協会の大阪府連合会、兵庫県連合会、京都府連合会の共催で開かれた」との記述がありますが、これは事実と相違しています。当日は貴通信社及び在大阪ソ連総領事館の要請にこたえて、日ソ協会三府県連の会員が用意された読者会に出席したに過ぎません。これは日本語でいう「共催」にはあたらず、「三府県連の会員の参加により開かれた」と表現するのが妥当です。

上記について「今日のソ連邦」誌上に訂正文を掲載するよう要請します》

ノーボスチ通信 特派員報告

鳴動するレバノンの火山

E・ミキテンコ記者（ベイルート）

先の米トランスワールド航空機の乗っ取り事件は、現在のレバノン情勢の劇的な動きをよく物語っている。ベイルートの新聞によると、ベイルートでのパレスチナ人とレバノン軍第6旅団に支援されるイスラム教シーア派民兵組織「アマル」との流血の衝突事件の結果六〇〇人が死に、約二〇〇〇人が負傷した。米国はTWA機乗っ取り事件を利用して、中東地域に兵力を終結しており、情勢は極度に緊迫している。

次にベイルートのある一日の事件簿を紹介しておくが、ほかの日もこれと似たりよったりである。

――午前8時30分。西ベイルートのアル・ブスト地区の"青物市場"は、いつものようににぎわっていた。そのとき2回爆発音がとどろき、爆発の結果、5人が死に、45人が負傷した。ラジオ放送によると、犯人は不明だという。

――その2時間後市の中心部で銀行の2台の現金輸送車から大金が強奪された。これも犯人は不明……

――正午、ベイルート国際空港に、イスラム教シーア派グループに乗っ取られた米トランスワールド航空機が着陸した。

――ベイルートのカナダ大使館は大使館を閉鎖すると発表し、館員はシリアに移った。理由は西側の外交官、ジャーナリスト、教師の誘拐事件が頻発しているため……

――午後8時、二人の男の乗った車がレバノン軍第6旅団の防衛施設に突入、爆発した結果（車には二〇〇kgの爆薬が積まれていた）、15人が死亡し、38人が負傷……

――23時15分、正体不明の者たちがベイルートのアラブ大学地区のレバノン軍陣地を銃撃……

――終日、サブラとシャチラのパレスチナ人難民キャンプで軍事衝突が続いた。

――レバノンの首都を西部地区と東部地区に分けている"グリーンベルト"で、敵対グループの戦闘行動が終夜続いた結果、5人が死に、56人が負傷……

レバノン・テレビ放送局のアナウンサーはニュース番組の冒頭で「一体いつレバノンの火山は静まるか」と悲痛な表情で述べた。

レバノンの諸事件はレバノンの敵のもくろみにかなっている、とカラミ・レバノン首相は最近のインタビューで語った。彼は、団結してイスラエル侵略者のこうかつな計画にたち向かうことが、すべてのレバノン人の主要な課題である、と指摘した。

だがいまのところレバノンの火山はいぜん鳴動している。

英国流の差別撤廃

S・ボロベツ記者（ロンドン）

18年間英国で暮らしているフィリピン女性アルセリ・カバレスさんは、もう5年も夫のリュドビコさんの顔を見ていない。これは夫婦喧嘩のせいではなく、英国当局が、移民法に基づき英国籍のない奥さんのもとで暮らそうと願う夫の入国を許可しないからだ。

昨年こんな仕打ちに耐えきれず、カバレスさんら3名の女性が、ストラスブールの欧州人権擁護裁判所に訴え出たところ、英国は入国に対して差別待遇をしているとの決定が下った。

この決定に対して、打てば響く反応があったが、その反応たるや少し意外なものだった。英国内務省は、英国に居住する女性の夫に入国の道を開くかわりに、英国に住む自分の夫と一緒に住むことを希望する女性の入国規則を厳しくするもようであり、こうして裁判所の決定を守りながら、差別を"なくそう"としており、結局男女を同じように無権利にする意向である。

米大統領に手紙を書くな

I・ドロフェーエフ記者（オタワ）

カナダのトロント市のトニー・ハリンバーティ君（12歳）は、全世界の運命に触れるテーマについてレーガン米大統領と話し合ってもむだなことをしみじみ納得した。しゃくでたまらぬ少年は、当地の「トロント・スター」紙に投書した。

「この手紙の目的は、全地球的意義をもつ問題についてレーガン大統領に手紙を書かないよう、読者の皆さんに忠告するためです。書く価値はありません。

ぼくは、ぼくが"スターウォーズ"計画に反対していることを説明した後、"スターウォーズ"と核戦争全体について大統領に書きました。また、ぼくは戦争に終止符を打つはずの多くの各種兵器（たとえばダイナマイト、機関銃）が発明された当時、人々は"機関銃火を浴びるような戦場にかり立てられることはあるまい"と思ったのに、やはり戦場にかり立てられたのです。

ぼくがもらった返事は大統領からではなく、アンナ・ヒギンズ報道担当補佐官からでした。その手紙には、ぼくがカナダ人であることをはっきり書いたのに、ヒギンズさんは米国の若者に話しかけるように書いています。ぼくが手紙では大統領のことを少しもよく書かなかったのに、大統領に対するあなたの好意に感謝する、と書いてあります。

この手紙は明らかに出来合いのもので、ヒギンズという署名の写真コピーが添えられていました。その上プレゼントとして大統領が白馬にまたがって疾駆している写真が同封されていました。

読者の皆さんは、なぜ私が米大統領に手紙を書くことが無意味だと考えているか、お分かりだと思います」

ソ連の新聞記事から

（一九八五年6月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で、科学技術進歩促進の諸問題に関する会議の結果と、会議で提起された諸提案の実現のための措置を審議した。

この会議は、党の経済戦略の実現にとって第一義的意味を持つと指摘された。同会議では、国の社会・経済的発展の促進、科学技術の成果の導入に基づく国民経済の質的な再編成、管理および経営機構の改善という科学的に裏付けられた考えが述られたが、このようなわが国経済の状況に関する現実的評価は共産党員と全ソ連国民の完全な支持を得ている。

政治局員は連邦構成共和国の共産党中央委員会、地方、州、管区、都市、区の党委員会、初級党組織に対し、現段階で国が直面している課題を考慮して党活動を再編成する義務を負わせた。

（プラウダ紙6月21日号）

※　※

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で、ソ連共産党綱領の新稿の準備状況を審議した。

党綱領の新稿はソ連共産党第27回大会の最重要文書となろうと指摘された。

綱領の基盤は、長期的展望に立ち、国の経済・社会的発展計画を正確にはかりにかけ、計画と正確に一致した現実的なものでなければならないことが強調された。綱領の中心的地位を占めるのはソビエト社会・経済的発展の促進、科学技術進歩を土台にした経済の集約化、社会的諸関係のあらゆる体系の改善、共産主義社会に向かっての国の前進運動の新段階への到達の諸問題である。

政治局はソ連共産党綱領新稿作成準備委員会議長にM・S・ゴルバチョフがなることを承認し、新稿作成の今後の作業手順を定めた。

政治局はM・S・ゴルバチョフおよび他の指導者とH・アサド大統領を団長とするシリア代表団との会議の結果を審議し、了承した。

（イズベスチヤ紙6月30日号）



（S・ネチャエフ作、トルード紙6月16日号）

党中央委でマスコミ指導者と会談

ソ連共産党中央委員会で6月18日、マスコミ指導者との会談が行われた。科学技術進歩の促進問題に関する会議の基本方針から出てくる課題が検討された。

M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は会議参加者に演説した。

科学技術進歩を基盤にした国の社会・経済的発展の促進という党の方針と国民生活の新たな諸要求に合うよう社会意識を心理的に再編成する上で、出版、TV・ラジオの果たす重要な役割が強調された。

マスコミは一九八五年度の計画および5カ年計画全体を成功裏に遂行する闘いで、党および国民を積極的に援助しなければならない。

会議にはN・I・ルイシコフ・ソ連共産党中央委政治局員・書記、M・V・ジミャーニン党中央委書記が参加した。

（プラウダ紙6月19日号）

コムソモリスク＝プリポリャールヌイ市の建設

ヤンブルグは膨大なガス鉱床を擁する沼地に囲まれた西シベリアのチュメニ州のまちである。コムソモール突撃隊の五〇〇〇名がこの先5年の歳月をかけて、ここにコムソモリスク＝プリポリャールヌイ市を建設する。そのため住宅や各種施設の建設にはスーパーブロック（各三〇〇－四〇〇t）が使われる。

（イズベスチヤ紙6月21日号）

一五〇〇kmの送油管稼働開始

延長一五〇〇kmの西シベリア＝ウラル＝ボルガ川流域地方を結ぶ送油管への注油がこのほど始まった。このパイプラインで送られる石油ガスの一次加工品は、ウラルとボルガ川流域の石油工業企業でさらに精製される。パイプラインの開通により多数の貨車があく。

（イズベチヤ紙6月18日号）

互いの貿易伸長の意思を確認

――7年ぶりのソ米合同通商委員会

本誌記者 ボリス・アレクセーエフ



会談を前にボルドリッジ米商務長官（左）と握手を交わすパトリチェフ・ソ連貿易相

「記念にお持ち帰り下さい」――ニコライ・パトリチェフ・ソ連貿易相は、議定書の数ページにサインを終えたばかりのマルコム・ボルドリッジ米商務長官に羽根ペンを差し出した。「やぁ、ありがとう。2日間あなたと一緒に仕事ができて、とても楽しかった」と長官は笑みをうかべた。

モスクワの貿易省で5月20日、7年ぶりに開かれた第8回ソ米政府間合同通商委員会の会議は、ソ米通商関係の現状と見通しに関する幅広い問題を非公式に討議し、21日、議定書に調印して幕を閉じた。

「そういえば合同委員会の第1回会議もこの部屋で行われたのだ。委員会は設立後の7年間に7回会議を開き、かなりの成果を挙げた。われわれは70年代の成果にとても満足している。もし米国が対ソ貿易政策を急転回しなかったら、いまわれわれの取引はとても大きなものになっていただろう」

パトリチェフ貿易相はこう述懐した。貿易相が語った急転回とは、米国がソ米貿易の諸問題に関する一切の公式接触を断ったことだ。

その結果はすぐに現れ、米国は対ソ貿易をやっている国の下位に落ちた。しかし昨年ソ米貿易額は一九八三年の一九億ルーブルに対して三一億ルーブルとなり、再び上向きに転じた。

委員会の会議でソ連側は取引国間の信頼の回復と貿易不均衡の是正を求めた。現在対米貿易は米国の黒字になっており、米国の出超額は二五億ルーブル以上に達している。これは米国側がソ連商品の米国市場進出を人為的に妨げているためで、毛皮のような商品さえもう34年間も輸入を禁止している。

しかし、どうやら事態はどん詰まりから少しずつ進展しだした。会議終了後発表されたコミュニケは「双方はソ米合同通商委員会の活動の長い中断後の再開が、両国の通商関係の現状の改善を促進したいとの双方の意図を反映していることを認めた」と述べている。

ソ連の貿易公団と米国の商社は、まず第一歩として約50件の実務協力プロジェクトを準備した。協力分野も製紙工業、石油化学工業部門、農工コンプレクス部門、石炭・ガスの採取などと決まった。

ボルドリッジ米商務長官は交渉は"とてもうまく"運んだと強調したのち、ただ今調印した協定により、米国はソ米プロジェクトの検討・実現援助分科委員会を設置し、協力促進委員会の活動を再開し、新海上輸送協定の準備作業を始める義務を負うことになったと説明した。

またボルドリッジ商務長官は「われわれは、米国の現行法のわく内でソ連の輸出組織が米国市場で差別待遇を受けないよう監視していくつもりである」と語った。

パトリチェフ貿易相は、米国の対ソ貿易はようやく動き出したにもかかわらず、両国の貿易を妨げる主な障害はいぜん残っていると指摘したが、これは米国のいわゆる「戦略物資」の対ソ禁輸、政経不分離政策をさしている。

さらにパトリチェフ貿易相は次のように述べた。

「米国側は貿易は、他の分野のソ米関係の発展テンポを超えてはならないと言っているが、この意見は絶対に間違っていると思う。貿易は他の分野の関係の培養基であり、前進させねばならない。対ソ禁輸、禁止政策は誤りであり、効果がない。米国側がこの誤りを正すことを期待している」

XII·MOCKBA·1985

青年学生祭の参加者を待つモスクワ

本誌前号で第12回世界青年学生祭の開催地モスクワを詳しく紹介した。いまモスクワは世界の青年代表の到着を待っている。青年学生祭参加のために興味深い中味の濃いプログラムが用意されており、モスクワの一流ホテルや公共施設、スタジアムや公園は世界の青年たちに広く開放されよう。

第12回世界青年学生祭の開会式は、第22回オリンピック大会や一九五七年の第6回世界青年学生祭の開会式の会場となったルジニキのレーニン中央スタジアムで行われる。一九八五年7月27日の土曜日、一〇万人の観客が見守る中を各国の代表団がスタジアムのフィールドに勢ぞろいし、祭典の火が点火され、数千羽の白いハトが放たれ、一大ページェントが始まる。

青年学生祭の期間中ルジニキでは、希望者全員が参加できるさまざまな競技や有名選手のエキジビション、人工リンクでのアイスダンスが行われる。

モスクワの一流ホテルは青年祭の参加者、来賓の宿舎になって、各国代表団のクラブが開設され、また一部は同時に青年学生祭のセンターにもなる。クラースナヤ・プレスニャの「メジドゥナロドナヤ」（国際）ホテルには平和と軍縮のセンターが置かれ、青年たちは核戦争の防止と軍拡競争の停止の方法と手段、平和と安全保障の問題を討議する。またこのセンターでは反戦闘争での信者と無宗教者の協力の問題が審議され、有名な国際平和運動家たちとの会合が行われる。

中央ツーリスト会館には観光センターが、「オルリョーノク」（子ワシ）ホテルには非同盟運動センターが開設される。

反帝連帯センターは、発展途上諸国の留学生が学ぶルムンバ民族友好大学に置かれる。ここの会議には、自国の民族独立闘争の青年リーダーたちや独裁・ファシスト政権に反対する闘士たち、帝国主義と反動勢力の侵略政策の犠牲者たちが出席し、発言する。

国際連帯バザーは、7月27日からソ連国民経済成果博覧会の構内で開かれ、フェスティバルのみやげ品、バッジ、本などが販売される。売上金は苦しい条件のなかで活動している進歩的、民主主義的青年団体の支援に使われる。国民経済成果博では希望者は、青年の権利センターや環境保護センターの活動に参加し、「ソビエト国家の青年」展を観覧することができる。またクラシック・カーのパレードもここで行われる。

ソ連最大の大学・学術センターのモスクワ国立大学は、学生プログラム・センターになる。モスクワ大学にはいま世界一〇〇カ国以上の青年がソ連の学生と机を並べて学んでいる。フェスティバルの期間中大学の全構内は祭典参加者たちに開放され、約一万五〇〇〇人の青年が大学の寮に泊まる。モスクワ大学の学生はガイド、通訳、サービス部門の従業員になる。センターのプログラムには同好の学生の会合、著名な学者、社会活動家たちとの会合などが盛られているが、最大の行事の一つは国際学生舞踏会であろう。

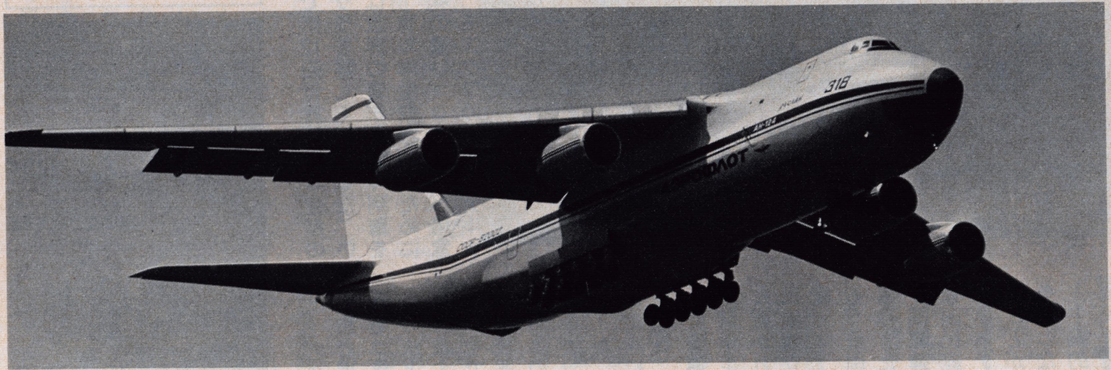
国際芸術公園はモスクワ河岸通りの景色のよいゴーリキー公園に置かれる。公園の並木道には15のテントが張られ、ここでソ連のすべての連邦構成共和国の代表がコンサート番組を披露する。パビリオンではフォークソング・グループや政治歌謡の歌手、有名な歌手や俳優が出演する。芸術公園では政治歌謡フェスティバル、芸術カーニバル、ヤング映画人フェスティバル、世界諸国民の祭りなどの行事が催される。

国際芸術公園の隣の美術家中央会館は、芸術青年センターとなり、俳優、音楽家、美術家、文学者、映画人、サーカス芸人などの12の創作スタジオが活動する。多くの美術家は自分の作品をフェスティバルに持ってきて、国際展に出す。主催者側のもくろみでは国際展は、世界のさまざまな国の若い芸術家の多面的な精神的利益や現代の諸問題に対する芸術家の積極的態度を反映するはずである。センターでは国際展のほかに美術家のフェスティバル・スタジオが開かれ、ここで美術家たちは自分の創作意図やフェスティバルの初印象を絵画や彫刻に表現することができよう。

モスクワのレーニン丘のピオネール・学童宮殿には**国際児童センター**が置かれ、「子供の友のクラブ」では訓育と学校教育の諸問題の会議が催される。またセンターはフェスティバル全体の祭日「ソビエトの子どもたちのお客になった第12回フェスティバル」を催し、モスクワ郊外のピオネール・キャンプの夏の休息のもようを代表や観光客に紹介する。国際児童フェスティバル・キャンプ「オリンピーエッ」が設置される。

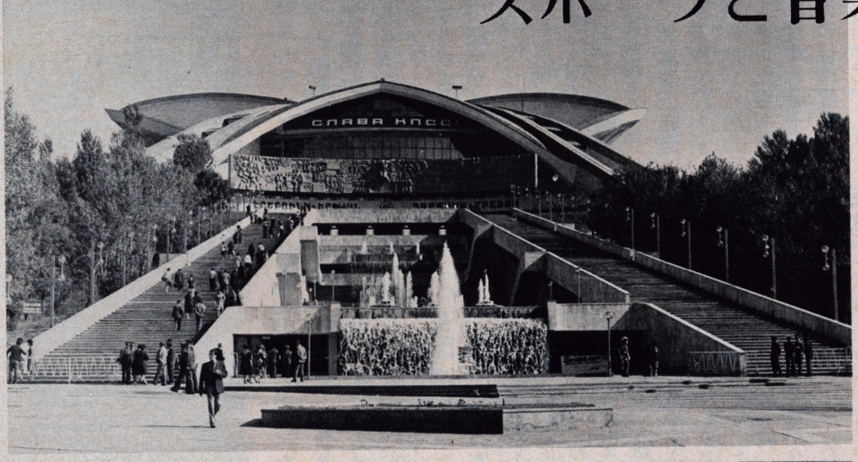
モスクワの約三〇〇の文化施設をフェスティバルの参加者と来賓に提供し、利用してもらう。モスクワの文化宮殿、会館では39の各国代表団のクラブが活動する。さまざまな国の美術家がクラブの内装を受け持つ。クラブでは各国代表団の祝賀コンサートやダンス・コンクールが催される。

巨人輸送機ルスラン



パリ郊外ブルジェ空港で５月31日から６月９日まで開催された第36回パリ航空宇宙ショーにソ連の新型輸送機アントノフ124（AN124）が出品された。同機はロシアの伝説上の勇士ルスランの名がついた巨人輸送機で、高名な航空機設計家アントノフの名を冠した設計局で開発されたもの。貨物積載部が大きく、幅6.4m、高さ4.4m、長さ36m以上もある。前と後ろの２カ所のハッチから積み下ろしが出来、150ｔの貨物が運べる。航続距離１万6500km、時速850km、上昇限度１万2000m。非金属が多く使われ、設計上も今までにない工夫がこらされており、操縦室に装備されたコンピューターはあらゆるポイントや系統の状態を瞬時にディスプレイする。

スポーツと音楽の殿堂





アルメニア共和国の首都エレバン市に新しいスポーツ・コンサート総合施設がオープンした。客席数五〇〇〇の大コンサートホールでは各種のスポーツ大会が開ける。大ホールと小ホールの間には一〇〇〇人収容の回転客席があり、15分間で、音をたてずに大小ホールのどちら用にも転換できる。大ホールのステージはちょっとの間にフィギュアスケートやアイスホッケー競技用のリンクに早変わりする。さらにここには各種設備が調ったトレーニング室もある。

ヤング向けのモード会館



ソ連初のヤング・モード会館がモスクワにお目見得した。ここではデザイナーやファッション・クリエイターたちが主にヤング向け市場を狙って腕を競い合っている。展示ホールやファッションショー会場のほかに、上着、ドレス、各種小物を制作する工房もある。

ここで発表される作品はすべて国産の生地を使用。エアロビクスやディスコ向けのエレガントなスポーツウェアも制作されている。

第12回国際青年学生祭のファッションショー用コレクションの仕上げが進行中。

生産のロボット化

産業ロボットはコンピューターと並ぶ科学技術革命の推進力。ソ連ではロボット導入により労働生産性上昇、コストダウン、品質向上が図られ、また単純労働、重労働、危険な労働の無人化が進められている。写真は自動車産業生産技術研究所がレーニン・コムソモール記念モスクワ自動車工場用に開発した鋳造部品製造自動化ライン。このラインの導入で部品の製造コストが半減した。





2人乗りのトルネード級（1976年からオリンピック種目）のスタート。

海のロマンに魅せられた大勢の腕白たちがモスクワのスポーツ協会〝スパルタク〟のジュニア・ヨットスクールに通っている。場所はモスクワに近いクリャジマ貯水池（オカ川の支流クリャジマ川にある）。子どもたちは8歳からヨット帆走理論のABCを習い、ロープワークを練習し、海の交通規則を学ぶ。

ヨットは少年たちの間で急速に人気が高まっており、全国のヨット部やヨットスクールに定期的に通っているジュニアのヨット愛好者は一万五〇〇〇人以上もいる。だが実際の数はこの数倍になると見られている。というのもソ連スポーツ委員会の統計には工場や農村のスポーツクラブにたいてい併設されているジュニア部は入っていないからだ。

ヨットクラブはどこも、大企業の付属クラブならなおのこと、専門のヨットスクールに引けを取らない設備を持っている。ヨットスクールには国際級の〝オプチミスト〟や〝カデット〟の艇がある。小型の〝オプチミスト〟でも買えば一〇〇〇ルーブル位かかるし、ジュニア用ヨット〝ルーチ〟は最高二〇〇〇ルーブル（1ルーブルは約三三〇円）はする。だがこの高価なヨットがただ同然で使用できるのだ。

スポーツ

8歳からのヨット

——すそ野を広げるソ連のヨット界

カメラ　I・ウトキン





助け合いは海の男のおきて。







そのためにはヨットスクールの所属団体に年会費を払う必要があるが、年会費はとても安く、0・3ルーブル（約一〇〇円）。それだけ払えば乗りたいだけヨットに乗れる。

ヨットを操りながら少年たちは空気力学や物理学を学ぶ。ヨットマンは普通、練習や競技のために自分で艇を整備するので、手先の器用さも身につく。ヨットは技術的難易度の最も高いスポーツの部類に入るが、8歳で練習を始めると9歳頃には舵さばきもなかなか堂にいったものになる。

ソ連では極東の太平洋沿岸からバルト海まで至るところにジュニア・ヨットクラブがある。モスクワ近郊の川や湖、ボルガ流域の貯水池、グルジアのトビリシ人工湖、アルメニアのセバン湖、アゾフ海や黒海、カザフスタンのバルハシ湖やベロルシアのサルィチ湖——どこへ行ってもヨットの三角形の帆が水の上に浮かんでいる。

ソ連の少年の間でヨットが盛んになるにつれ、国際舞台での活躍も目立つようになってきた。一九八一、八二年の〝四七〇〟級ジュニア（16—19歳）世界選手権ではソ連勢が連覇した。同じく八一、八二年のフィン級ジュニア欧州選手権でもソ連チームが優勝した。一九八四年のこの選手権ではレニングラードの中学生アレクサンドル・ジューコフが参加49艇中3位になり銅メダルを受けた。

上　ヨットレース中のアントン・クジュク君。

下　ワロージャ・ウシャコフ君とサーシャ・クジュク君はヨット以外にチェスも大好き。

左上　カデット級のヨットで練習する少年たち

左下　〝スパルタク〟スポーツ協会のヨットクラブの前で





▶ヒロシマ・ダンサーズの主宰者古月公子さんにママイの丘の母なる祖国像のミニチュアを贈るヌリ・アフメトフ・ソ日協会ボルゴグラード支部長。左端は団長の木村秀夫氏。

心からほとばしり出た芸術

――ヒロシマ・ダンサーズの公演



激戦の跡を示す建物の前で記念撮影するヒロシマ・ダンサーズの一行



友好会館でのソ日協会ボルゴグラード支部の活動家との会合

「このようなものは見たことがない。これは、心からほとばしり出た芸術、苦しみと体験から生まれた芸術です。だからこそ、その真実味がひとの心を激しくゆさぶるのです」

ボルゴグラードの若い女優マルガリータ・ザブルノワのこの言葉ほど、ヒロシマ・ダンサーズが上演したバレエ『ノー・モア、ヒロシマズ――星ひとつまたたきて』（ことしの3月11―13日）が観客に与えた印象を言いつくした言葉はない。

ボルゴグラード市民には日本の芸術はおなじみである。日本のアーチストたちの公演はいつも多くの観客をひきつける。けれども、ボルゴグラードの姉妹都市広島からバレエ団がくるというニュースはたいへんな関心の的になった。ボルゴグラード市やその衛星都市ボルジスキー市での公演は大入り満員の盛況だった。

ソ日協会のボルゴグラード支部長をしている州立病院のヌリ・アフメトフ医師長は言う――「ボルゴグラード市民で広島の悲劇を知らない者は恐らくひとりもいないだろう。だが、こんどの公演は、40年前の出来事を追体験させてくれるめったにない機会となった。私たちまでこの悲劇の直接の参加者になってしまったような気がする。それほど強い印象を与える公演だった。それは力と手段のかぎりを尽くして平和のために闘い、非人間的な核兵器を決して再び使わせまいという決意を全身にあふれさせる」

バレエ団一行は第2次世界大戦の決戦場となったボルゴグラードの市内を胸の迫る思いで見物した。広島を全滅させるにはほんの一瞬しかかからなかった。ボルゴグラード（旧スターリングラード）をファシスト・ドイツ軍は多くの日数をかけて組織的に、情け容赦なく、野蛮なやり方で破壊した。そういう違いがあっても、結果は同じ破壊と苦しみと死であった。

最も激しい戦闘が行われたママイ丘に、いまスターリングラード戦の戦没将兵の壮大な記念碑アンサンブルがそびえ立っている。パンテオンには永遠の火が燃えている。数千人にのぼる戦没将兵の名を壁面に刻みつけたこのホールで、広島からきた賓客たちは一分間の黙禱を捧げた。

ヒロシマ・ダンサーズの滞在日数はわずか5日だったが、この間に一行は、ソ日協会の活動家や文化人など多くのボルゴグラード市民と会った。また一行はアナスタシア・マルサコワ副市長に温かく迎えられた。

「ボルゴグラードに来てみて、この都市も広島と同じ悲劇を味わったのだと思いました」と、ヒロシマ・ダンサーズ一行の団長木村秀夫さん（国際芸術家センター理事長）は語る。「私たちの出し物は娯楽ではありません。楽しい気持ちにさせるバレエではありません。この作品を貫いているのは、決して広島の悲劇をくりかえさせまいという思いだけです。ボルゴグラードの人たちがそのことを分かってくれ、それを高く認めてくれたことを私たちは喜んでいます。これからも私たちは私たちの芸術の力で平和のために闘うつもりです」

ボルゴグラード駐在本誌記者
アレクサンドル・エブレイノフ
カメラ　B・ダブイドフ

新刊ダイジェスト

『核の時代における新しい思考』

アナトリー・グロムイコ
ウラジーミル・ロメイコ 著



原著の表紙

一九八四年にモスクワの国際関係出版所から国際関係の専門家でソ連科学アカデミー準会員のアナトリー・グロムイコと有名なジャーナリスト、ウラジーミル・ロメイコの共著『核の時代における新しい思考』（二九二ページ）が出版された。

現代の複雑で困難な問題の中で最も差し迫った問題は、人類を襲っている核の危険である。歴史上初めて種としてのヒト全体を滅ぼすための方法だけでなく、その物質的な力までも手に入れた人類は、自己を維持するために、周囲の世界を新しく見直さなければならない、と著者たちは主張している。本号ではこの本からいくつかの部分を抜粋して紹介しよう。

「人類が生き延びてさらに発展するためには、人類の思考の新しい方法が必要だ。いまや原子爆弾は、世界を根底まで変えてしまった。われわれはそれを知っている。人間は新しい情勢のもとにある。人間の思考もそれに対応させなければならない」

アルバート・アインシュタイン

生き残るためにはどう暮らすべきか——敵対してか、共存か？

世界の大政治家や学者たちにアンケートして、いま人類にとって何がいちばん重要な問題だと考えるか、と質問すれば、多くは〝生き残ること〟と答えるだろう。だが、生き残るためにはどのように暮らすのか——共存してか、敵対し合ってか？

設問そのものが月並みに思われるかもしれない。なぜなら、答えは自明だからだ。だが、結論を急ぐ必要はない。何しろ西側には、相手を脅かす政策を遂行することによってのみ生き残ることができる、と考えている人間が少なくないのだ。このような人々の影響は一連の国で、何よりもまず米国で、支配的である。だから最も主要な、死活的に重要な問い——〝どのように暮らすのか？〟には、さまざまな答えがあるわけだ。

われわれにそれを確信させたのは、近年開かれた多くの国際フォーラムでの討論だった。そこでは、どうしたら生き残れるかという問いに関して、かなり矛盾する見解が述べられた。この問題に対するわれわれのアプローチは、外国の多くの参加者にとって必ずしも自明ではないのである。それでも、われわれに反論する人々の中で最も先入観にとらわれていない人たちは、**核の時代には新しい思考が必要だ**という問題提起には関心を示した。

地球上の生命の存在そのものを脅かすほど大量の核弾頭を保有しながら対立する勢力の間におおよその均衡（パリティー）が生じた時期に、人類は科学技術革命と社会変化の今日の水準に見合う新しい考え方が必要な時代に入った。

もちろん、広島と長崎で最初の原子爆弾が爆発してから、多くのことが根本的に変わった。政治的な見解に関係なくすべての人にとって、核戦争を防止しなければならないということが、最も重要な問題になった。だが、すべての人がこの教訓に学び、将来の危険をはっきり予見できるようになった、というには程遠い。そのためには、〝ラッセル・アインシュタイン宣言〟に署名した大学者たちが一九五五年に呼びかけたように、新しい考え方をする能力が必要だった。

対立する双方が何万発もの核弾頭を保有し、核軍拡競争が相手を10回、50回、さらにそれ以上せん滅できるレベルを越えた核軍拡競争に変わってから、ようやく新しい思考が人類救済のために死活的に重要な要求になったのである。核の時代になって、新しい諸要素が生まれ、国際関係のすべての分野に対して影響を強めている。

それらの新しい要素とは何か？

第一の要素。 歴史上初めて大量殺りく兵器が発明され、それらの兵器——何よりもまず核兵器が大量に蓄積されて、人類そのものの存在を終わらせる物質的可能性が作り出されたこと。

第二の要素。 二つの軍事・政治ブロック——NATOとワルシャワ条約機構が初めておおよその均衡に達し、これが〝過剰殺りく〟の条件のもとで両ブロックのすべての加盟国にとって核戦争を、それをどちらが始めても、自殺行為に変えてしまうこと。

第三の要素。 核軍拡競争も含めて、軍拡競争が非常な規模とテンポに達し、それが抑制が利かなくなり、工業発展国にとってさえ耐えがたい重荷になるというおそれが生まれていること。全世界で1日当たり約一五億ドルの軍事費が使われており、これは人類による物質的、知的資源の膨大な浪費である。

第四の要素。 軍拡競争、何よりもまず核軍拡競争は核破局の確率を高めるだけでなく、工業発展国と発展途上国の断絶をいっそう強め、発展途上国の債務を増大させていること。これは近い将来、〝南北問題〟を一触即発の状態にまで激化させ、これが世界的な紛争の原因になりかねない。こうして、すべての国にとって、軍事費を削減し、発展途上国への援助を増やす追加の資金を探す必要性が急激に高まっている。

第五の要素。 最近の数十年間に人類は歴史上初めて、人間と環境の相互関係の図式を変えてしまった。これまでは何世紀にもわたって、進歩の程度は自然に対する人間の力の程度に左右されてきたが、これからは人間の進歩だけでなく、生活そのものまでが、自然に対する人間の配慮と援助にますます左右されるだろう。人間の軍事活動や工業活動の環境に対する悪影響に対抗するためには、破壊的な軍拡競争を抑制し、環境の保護と再生のための支出を増やさなければならない。さもなければ、自然への影響の有害な結果（大気汚染、砂漠化、森の消滅、水質汚濁その他）は取り返しのつかないものになり、後世の人々にとっては破滅的となるだろう。

これらの質的に新しい諸要素の出現は、われわれの地球を一つの共同の家に変え、住民一人ひとりの幸福は相互に依存するようになり、お互いの行為へのこの依存、広い意味での共同の安全措置への依存は不断に増大している。

現に存在し、増大しつつある危険について言えば、われわれの共同の家である地球は、**三つの時限爆弾**を抱えていると表現できよう。

第一の爆弾。 最も強力で最も危険な爆弾は軍拡競争である。兵器庫が大きくなるにしたがって〝偶発戦争〟の確率が高まる。レーダーがとらえた不正確な信号、コンピューターのミス、頭のおかしい軍人——こうしたちょっとしたことでも、数分後に幾百万人の上に核爆発をもたらすには十分なのだ。ここでは因果関係はきわめて直接的で、世界に核兵器が多くなればなるほど、戦争勃発の確率は高くなる。

第二の爆弾。 それは発達した国々と発展途上諸国の間のますます広がる断絶である。この断絶は社会的不和、民族的反目を鋭くしており、〝第三世界〟内部の緊張だけでなく、発展途上国と発達した国々との間の緊張をも増大させ、世界的規模の核紛争の可能性をはらむ地域的戦争の発生を助長している。

第三の爆弾。 いわば生態系爆弾、人間を取りまく環境を破壊するあらゆる要素の総体がそれである。あるいは、必ずしもすべての人がいま、迫りつつある危険の重大性を明確に理解していないかもしれない。だが、多くの研究は、人類が自然に対する有害な影響の規模を縮小せず、自然に対する援助を強めなければ、人類は破滅を免れないことを証明している。

〝生態系爆弾〟はわれわれすべてを脅かしており、地球上の生命を守るための闘いにおけるわれわれの責任と団結をますます鋭く感じさせている。地球上の生命を守るためには、脅威の原因を明らかにし、人間と自然が生き残るための統一戦略を作成する必要がある。

核の時代における新しい思考の必要性を語るにあたって、われわれは第一義的に重要な事実の自覚を念頭に置いている。それは**〝生態系爆弾〟は人類全体を脅かしており、それは共同の努力によってしか解消できない**、という事実である。それは、生態学の分野では、軍事その他、国際安全保障や人間の幸福および健康の利益と相容れない目的での自然環境への作用を防止し、すべての核実験を完全に禁止し、軍備を凍結し、そののち削減して、それによって浮いた資金を生態学的問題の解決に振り向けることを目ざす国際条約の締結を意味する。

生き残るため、わが家——地球を救うために、人間は何よりもまずこれらの危険を認識し、それが人々にとって共通の性格を帯びており、それを取り除くための**猶予ならない共同の努力**を要求している、ということを認識しなければならない。

手遅れにならないうちに、**これら三つの時限爆弾を処理し、無害化する必要がある。**その際、主要なこと、軍拡競争の抑止と軍縮から始める必要がある。第一に、それは最も大きい、最も差し迫った危険を根絶することを意味する。第二に、それは同時に第二、第三の爆弾を無害化するために必要な手段を引き出す方法でもある。軍事費の大幅な削減は、浮いた資金の一部を発達した国々の社会プログラムの拡充、発展途上国への援助、環境保護計画に振り向けることを可能にするだろう。

こうして、増大しつつある〝過剰殺りく〟と地球的諸問題の先鋭化の時代にあって、**人類生き残りの哲学**を作成する問題が持ち上がっているのである。

二つの世界の戦争ではなく、競争と協力

対立する世界観にもかかわらず共存する忍耐力か、相手を撲滅あるいは抑圧するための対決か。これが世界理解、世界関係についての対立する二つの哲学である。この二つの哲学には、対立する二つの政策が対応する。すなわち、平和共存政策と軍事対決政策である。思想を強制的に押しつけるための手段としての戦争（戦争は思想を守る権利を奪うものではない）に真っ向から反対しているソ連は、軍事対決政策を拒否し、社会体制の異なる諸国家の平和共存政策を支持している。ほかならぬソ連こそが、対立するイデオロギーを持つ対立する社会・政治体制の平和共存を支持し、対決政策を好む者とちがってヒューマニズムと進歩の側に立っている。対決政策の根底にあるのは、自分と反対の考えを相手が持つことを許さない態度である。

ソ連国民はまた、デタントと軍事対決の中間的な状態としての〝冷戦〟にも反対している。ソ連国民が〝冷戦〟に反対するのは、それがまさに軍事対決の思想にもとづいているからである。

平和共存政策を選んだソ連は、国際緊張緩和、相互理解、経済や科学、文化、情報の分野も含むさまざまな分野での諸国家間、諸民族間の協力に賛成している。

デタントは世界全体の経済的、文化的進歩の可能性を広げる。なぜなら、それは精神財や情報の交換、国際交流を促進するからである。他方、経済、文化、教育、情報の分野での協力は、人間個性の完全化、人々——何よりもまず若者たちの平和教育を促進し、そのことによってデタントを強化する。

しばしば、平和共存、デタント、さらには協力も、イデオロギー闘争が継続されている条件のもとでは不可能である、という声を耳にする。さらに進んで、ソ連にイデオロギー対決を放棄するよう要求する者さえいる。このような人々は、イデオロギー闘争と協力は両立しないというテーゼを利用した平和共存思想の意識的な敵対者か、そうでなければ本気で誤解しているのである。

イデオロギー闘争を中止させることはだれにもできない。それは階級と異なる社会体制が存在する世界では客観的な歴史的カテゴリーである。と同時に、固有のイデオロギー装置を持つ異なった社会体制が世界に存在することは、平和、信頼、協力を確立する共同の妨げになってはならない。

ソ連国民は国際関係における対決を拒否する。だが、イデオロギーの分野での対立は不可避であると考えている。しかし、思想闘争は国際平和と協力の確立に対する共通の利益にもとづいて行われることが重要である。

その際ソ連は、経済、文化、教育、情報の分野における協力が各国の主権、法律、慣習を尊重し、経済の発展、諸国民の精神的充実、諸国民間の信頼の増加に益するように行われることに賛成である。

相互の安全が自己の安全と国際安全の保証

核の時代における**生き残り戦略**は、安全——自分自身の安全と相手の安全に対する新しい認識、ひいては国際安全への新しいアプローチを前提としている。国際共同体のすべての成員が核戦争を集団自殺として拒否するなら、核紛争の確率を高めるような諸要素の排除に関心を持たざるをえない。

そのような要素としては、何よりもまず、軍事的優位達成の指向とその結果としての核軍備および通常軍備の拡充競争が挙げられる。

長年の経験は、いずれの側もが軍拡競争の中止について合意することを心から願っていたとしても、協定にまで漕ぎつけるのは極めて困難であることを示している。緊張した国際情勢と相互不信の条件のもとではなおさらである。反面、引きつづく軍拡競争が緊張と不信を強めている。

この悪循環から脱するにはどうすればいいか？

ソ連と他のワルシャワ条約機構加盟諸国は、信頼強化措置に関する広範な提案を行った。その中で最も主要な意義を与えられているのが、武力の不行使と平和関係の維持について協定を結び、核保有国が最初に核兵器を使用しない義務を負うといった一連の大規模な行為である。

われわれの考えでは、各国の安全と国際安定を保障する分野で決定的な意味を持っているのは、われわれがすでに述べた国際関係における新しい合法則性である。すなわち、**核の〝過剰殺りく（オーバー・キル）〟と増大する各国相互依存性の時代にあっては、自分は害をこうむらず、相手にだけ害を与えて、一方的な利益を得ることは不可能である。**この合法則性を認めることが、新しい思考の一つの原則である。

米国で行われている核軍拡の全歴史は、軍産複合体の利益ではなく全国民的利益を考慮すれば、この合法則性を裏書きしている。米国が新種の兵器を採用することによって一方的な優位を獲得するたびに、ソ連は対抗措置を取ることを余儀なくされた。こうして米国は自分の行為によって、本質的には自己の安全を強化せず、逆に掘り崩した。軍拡競争が新しい、より危険なレベルに移ると、こんどは国際的な安定と国際安全が損なわれてしまったからである。自国民の利益、さらには人類全体の利益への最大の損失は、他国に対する優位を達成しようとして軍備をコントロール不能のレベルまで引き上げる国によってもたらされるだろう。核兵器を使って勝利を得ようなどという試みは言うに及ばない。

核の時代の現実は、力、優位、勝利、安全——自分にとっても、他人にとっても——というような本質的な概念の再検討を要求している。正確に言えば、核戦争はもはや他の手段をもってする政治の継続ではあり得なくなっており、核戦争には勝者はあり得ず、相手の安全を損なう一方的な安全はあり得ない、ということなのである。

核の時代における真の安全は、どちらの側も相手の利益を考慮するだけでなく、自己の安全のための措置を講じながら、相手の安全を損なう原因を作らないように考えることを基礎にした相互安全である。相互安全は平等と同等安全の原則にもとづいてのみ確保できる。

もちろん、そのような状態を達成することは、かなり長い、苦しいプロセスである。なぜなら、それは何世紀にもわたる戦争の歴史の中で形成された既成の思考のカテゴリーを拒否することを要求するからである。最近まで、一方の利益はしばしば他方の損失と結びついていた。いまでもNATOは、脅しの構想、相手に受け入れがたい損失を与えることを目的とする〝限定〟核戦争ドクトリン、〝長期〟核戦争ドクトリンに依拠している。

核の〝オーバー・キル〟時代の生き残り哲学は、力の優位と戦争での勝利という古い概念にもとづく従来の戦争・政治構想やドクトリンの再考を要求している。それと関連して、クラウゼウィッツの有名な公式——戦争とは他の手段をもってする政治の継続である——はいまでも正しいか、という問題が起こっている。この問題は、一見そう思われるほど単純ではない。クラウゼウィッツはいまでも、この19世紀前半の軍人（少将）・軍事理論家を好んで引き合いに出し、教祖と仰ぐ多くの脅しの哲学者、理論家、実践家にとって、使徒であり、師である。

諸大国を巻き込むような大きな戦争、すなわち世界大戦についての古典的な理解による戦争は、現在の条件のもとでは一定の地域、一定の時間内に、あ

るいは通常兵器だけに限定されることはありえない。ワルシャワ条約機構加盟国の指導部や西側の多くの政治家、軍事活動家の意見によれば、そのような戦争は不可避的に総力戦に転化する。それは相互破滅、すなわち人類にとって集団自殺を意味するだろう。果たして、このような結果をもたらす戦争は、他の手段をもってする政治の継続だろうか?

責任感のある常識的な人間ならだれでも分かるように、**大規模な戦争が不可避的に転化する核戦争は、他の手段をもってする政治の継続ではあり得ない。なぜなら、その結果、そのような政治の現実的な意味も、その目的も、その担い手も消えてしまうからである。**

軍拡競争をどう抑止するか?

軍拡競争の停止、軍事費の削減は可能だろうか?

多くの国際研究所、ソ連や米国、英国の優れた学者たちが証明しているように、現在、そのための可能性は存在する。まさに七〇年代に軍事・戦略分野において、対立する二つのブロックの指導国——ソ連と米国の間におおよそのパリティーができ上がったために、この歴史的なチャンスを利用しなければならないからである。いま存在するパリティーは兵器の種類でいくらかアンバランスがあるものの、これによってどの国も壊滅的な反撃を受けるリスクを冒さずに戦争を始めることは不可能になっている。パリティーは**核兵器とその運搬手段の実験、製造、展開を相互に凍結する**条約を結んで軍拡競争を中止することを可能にしている。

ここ数十年の経験は、より多い兵器がより大きな安全を意味しないことを証明している。安全は平等と同等安全にもとづいてのみ確保し、強化することができる。

多くの専門家が証言しているように、優位の達成をめざす軍拡は無意味である。なぜなら、技術の発達の現在の水準にあっては、二大国のどちらも相手に対する優位は獲得できないからである。軍拡競争には二つの結末しか実際にはあり得ない——破局か、協定を結んでそれを回避するか、である。軍拡競争の危険はさらに、それが自分自身に拍車をかけて、問題の政治的解決を妨げている点にもある。

新しい思考は、抑圧のドクトリンを相互安全のドクトリンで置き替える、というものでなければならない。**国際安全は、敵対し合ってではなく、共存してしか生き残れない、という簡単な公式にもとづかなければならない。**

何よりもまず、核戦争には勝者はあり得ないこと、核戦争で無事に残るのは不可能であること、核戦争は文明にとって破滅であること、したがって核兵器の使用は人類に対する最も重大な犯罪であり、どんなことがあっても正当化されないことを認めなければならない。諸国家が核兵器を最初に使用することを拒否する必要性はここにある。ソ連は一方的にその義務を引き受けた。

人類が核軍拡の悪循環から抜け出す第一歩は、核兵器の凍結である。ソ連はそれを提案しているし、相互主義にもとづいて自分の核兵器を凍結する用意がある。

第二歩は、大量殺りく兵器の新しい種類およびシステムの開発と製造の拒否である。ソ連はこれに関する協定を結ぶことを提案している。

第三歩は、平等と同等安全にもとづく核兵器および通常兵器の段階的削減で合意を達成することである。わが国はこのような提案も一度ならず行ってきた。

第一歩の凍結からすでに、軍事費の増大は止まるだろう。第二歩、第三歩で膨大な資金が節約でき、その一部を現代の最も差し迫ったあと二つの問題——発展途上国への援助の増加と環境保護計画の実現——の解決に振り向けることができるだろう。

こうして、第一の爆弾の時限装置をはずせば、第二、第三の爆弾の火薬を抜くことに順次着手できるだろう。

良識は、破滅をもたらす軍拡競争の継続に反対してただちに行動することを要求している。欧州での新たな核兵器の配備は、西側にも東側にも新たなミサイルを出現させ、エスカレートさせるだけである。その結果、欧州の安定は増大することなく、減少する。

宇宙を核軍拡競争の新たな舞台に変えることを防止しなければならない。ソ連は宇宙での武力の行使と宇宙から地球へ向けての武力の行使を禁止し、同時に宇宙空間の軍事化計画に確実な障壁を築くことを提案している。

人類の救済は人々が現代の新しい現実を認識するかどうかにかかっている。その主要な現実は、われわれすべてが相互依存の世界に生きており、われわれの唯一つのチャンスは力ではなくて理性なのだ、ということである。

″理性は拳よりも強し″

一九四五年8月の広島と長崎での原子の閃光は、核の時代の現実を新たに理解できなければ人類が行きつくであろう世界核破局の光景を、地獄絵のように浮かび上がらせた。

われわれがいま特に心配して核の時代の新しい思考の必要性を指摘するのは、人類共同体**全体**の側からの、政治家**全員**の側からの地球的な諸問題の解決に対するアプローチにおける主要な基準を根本的に変えることが必要だと考えているからである。なぜなら、これらの問題を解決するためには、何よりもまず地球上の生命にとって最も危険で直接的な脅威を取り除くためには、共同体の全成員の**共同の努力**が必要だからであり、それに反対するには一方の側の不同意だけで十分だからである。脅しの哲学と実践を信奉し、相手に対する軍事的優位を達成しようと目論んでいる影響力の強い勢力が存在することを見落とすわけにはいかない。新しい思考を打ち立てる問題が人類にとってこれほどまでに緊要で第一義的な意味を持っているのはそのためである。新しい思考が、全面的破局が到来するより前に勝利する希望はあるのだろうか? われわれは、あると考える。それはおめでたい理想論でもなければ、盲目の狂信でもない。それは理性の悲観主義を歴史の発展法則と文明の生命力への信頼にもとづく希望と確信に変える、意志の楽天主義である。

われわれの確信は何よりもまず、軍事・戦略パリティーを維持するという自分たちの政策を各国の安全と国際安全の保証、地上の平和維持の保証だと見なしているソ連その他の社会主義国の一貫した平和愛好によって補強されている。

われわれの確信の第二の要素は、人類に迫っている地球規模の脅威と、軍拡競争を停止することによってそれが解決できることに対する世界世論の理解が高まっていることである。平和をめざし、核戦争に反対する運動の新しい現象は、もはや政治家や専門家だけに頼らない西側の新しい住民勢力が、積極的な反戦活動に次々に加わってきていることである。

そして第三の要素は、資本主義国や発展途上国のますます多くの良識ある政治家たちが、核の時代の新しい現実、何よりもまずその中で最も主要な現実——軍拡競争がわれわれを根絶しないうちに軍拡競争を根絶しなければならないという現実を理解するようになってきていることである。

これまでの戦争のときには、国に恐ろしい脅威が迫ると、″祖国は危機に瀕している!″という呼びかけが愛国者を団結させたことを人々は知っている。核兵器の時代にあっては、熱核破局はすでに個々の国をではなく、われわれの地球全体を脅かしている。だから、いまでは、共同の祖国——地球に所属するという感情で結ばれたすべての人々の第一のスローガンは、″人類は危機に瀕している!″という呼びかけになるべきである。

これは誇張ではなく、情勢のまじめな評価である。そして、それはますます新しい社会層によって認識されている。だから、お互いに見解や哲学、政治的経験の異なる人々がますますひん繁に会うようになっている。これらの人々は多くの点で一致しないが、脅しの哲学、軍拡競争政策を受け入れないという点では一致している。

反戦集会、デモ、行進の波が新たな力で高まっている。新型ミサイルに抗議する人々の間には次のようなプラカードが見られた——″恐竜はあまりにも多く鎧を着込み、脳にあまりにもわずかしか灰白質を持たなかったために、他の動物よりも早く絶滅した″ ″核戦争はわれわれすべてを脅かしている″ ″行動しなければならない! ただちに! いま!″

ますます多くの人々が、まさにこのように人類の運命に対する自分の個人的責任を理解しているのである。核の時代の新しい思考は、われわれ、民族や信条、思想を異にする人々が自分たちを、ザイルで結び合って人生の山に登っている、と感じていることを意味する。

″人間の理性は拳より強い″とすでに16世紀に書いたのはフランスの人文学者・作家のフランソワ・ラブレーである。だが、この真理を理解するために、大勢の人々がどれだけ苦労したことだろう!

核の時代にあっては一つの道しかない。いまや、現代の複雑な地球規模の問題のもつれを一刀で断つことは不可能である。核の剣は、そのような解決を望む人々自身を傷つけるだろう。問題のもつれを入念に、共同の努力によってほぐすことによってのみ、人類を出口のない核の迷路から理性と信頼と協力の世界へ導き出す救いの糸を見つけることができるだろう。

ナホトカとハバロフスクを訪れた〝平和の船〟

極東駐在本誌記者 ウラジーミル・カルポフ
カメラ V・タラバシチューク







右上 ハバロフスク駅に到着した「平和の船」の一行
右下 自分で書いた絵やプラカードをもって集会に参加した子供たちもいた。
上 ハバロフスク駅での「平和の船」参加者歓迎集会であいさつする小田実氏

核の危険を除去する問題を討議するため「日本海・アジア平和の船」で訪ソした日本の各界代表三〇〇名は、4月27日から30日まで、ソビエト人の生活を視察し、平和・社会進歩をめざす共同闘争の諸問題を討議した。これらの代表は政治家、社会活動家、労組指導者、労組活動家、商社マン、労働者、農民、大学・高校生、主婦などから成る幅広い顔触れで、主催者は有名な日本の政治・社会活動家で、レーニン国際平和賞受賞者、国際労働運動研究協会会長の岩井章氏と作家・評論家の小田実氏であった。

小田実氏は次のように語った。

「極東における平和と善隣を強化する方法の一つは、日本、ソ連、中国、朝鮮民主主義人民共和国間の緊密な接触を発展、強化することである。この4ヵ国の都市を巡訪する企画が立てられたのは、3年前のことで、こんどついにそれが実現し、4月25日にソ連船プリアムーリエ号で新潟を出発、4月27日にナホトカに着き、そこから列車でハバロフスクに来た」

ハバロフスクでソ日両国の平和運動家たちは、第2次世界大戦終結40周年と広島・長崎原爆投下40周年を記念する1日の合同会議をもった。この会議の分科会でどのような問題が討議されたにせよ、たとえば労働組合や平和団体の活動であれ、反戦闘争における婦人、青年の役割であれ、あるいはマスコミの課題やわれわれ両国民間の信頼づくりをめざす文化人の役割であれ、そのつど必ず強調されたのは、反核闘争で両国の勤労者は統一し、共同行動を組まねばならないということだった。

「会議ではとても興味深い討論が行われた」と小田実氏は話を続けた。「私はマスコミ分科会の会議に参加した。この分科会では意見が自由に交換され、わくは全然なかった。討論の過程で、われわれ両国、両国民の平和を強化し、反戦・反核運動を強めなければならないとの意識が改めてわれわれの中に広



◀ハバロフスク中央広場の反戦集会では「核兵器の廃絶」を訴える声が響き渡った。

がった」

西田勝・法政大学教授は会議の成果を次のように評価した。

「″平和の船″に参加した人々は、ソ日関係の改善、互恵の貿易・経済、学術、文化面の接触の改善をめざすソ連政府の平和的イニシアチブを詳しく知った。極東における信頼醸成措置や極東の非核地帯に関する交渉を呼びかけたソ連の諸提案は、とくに急を要するものである」

若林漲・国際労働運動研究協会運営委員は次のように語った。

「日ソ反戦集会の主な行事が行われたハバロフスクで、ソ連側から市内見物、記念物や博物館めぐり、市のアマチュア・アーチストのコンサートなど息抜きのプログラムがわれわれに示された。しかしソビエト人の労働、学習、休息の条件を知る肝心の機会も十分にあった。われわれは企業、大学、中等専門学校、普通学校、労組サナトリウム＝予防病院、外科病院を訪れ、労働者、学生、医師、教師、中高校生と話し合った。こうした見学のさい、われわれは沢山のものを見たし、いろんなことを話し合った。そして改めてソビエト人が日本国民と仲よく暮らしたいと望んでいることを確信した」

ハバロフスクでの市民と「平和の船」との交歓は、ソ日合同の反戦行進で最高の盛り上がりをみせた。行進は「核兵器の完全廃絶！」、「ソ日両国民の友好万歳！」、「広島、長崎を繰り返させるな！」のプラカードや横断幕を掲げてハバロフスクの大通りをレーニン広場まで練り歩き、最後に広場で反戦集会が行われた。集会であいさつした岩井章氏は「″平和の船″は日本海沿岸に住む人々との友好、連帯を強めるために企画されたものである。きょうわれわれ日ソ両国民の代表は手を組んでハバロフスクの中心の通りを行進し、平和を望む熱意を表明した。われわれはこの前例のない行進から受けた大きな印象を日本の人々に伝えたい」と述べた。

岩井氏はたゆまず軍拡競争の中止と国際緊張の緩和に努めているソ連の平和政策を歓迎し、ジュネーブのソ米包括軍縮交渉での合意をめざすソ連の建設的提案の意義をとくに強調した。

集会参加者たちは、第2次世界大戦終結40周年と米国の広島、長崎原爆投下40周年の年に当たり核破滅の防止に力を結集しよう、と政治家、社会活動家、すべての善意の人々に呼びかけた共同アピールを採択した。

ハバロフスクの町々を練り歩く市民と「平和の船」一行の平和大行進



ヒロシマ40周年に捧げられた劇

——エレバンで上演



『ヒロシマ』の舞台から

アルメニア共和国の首都エレバンのカーメルヌイ劇場で、このほど現代アルメニアの劇作家ペルチ・ゼイツンツヤンの新作『ヒロシマ』が初演されて大好評をおさめた。観客は一様に首席演出家アラ・エルンジャキャンの意欲的な演出、芝居の人道的で先鋭な反戦的傾向、俳優たちの表現力に富む演技を評価した。

劇の中心は米軍のパイロットであるクロード・アイザリー（俳優はアルメン・アンバルツミャン）で、彼は犯した行いの恐ろしさを知って、ひどく苦しむ。もうひとりのパイロット、ジョー・スティボリック（俳優はゲオルギー・アミラゴフ）は、彼らが投下した原子爆弾が長崎の住民数十万人の生命を奪ったことを知ってもいささかも良心の痛みを感じない。

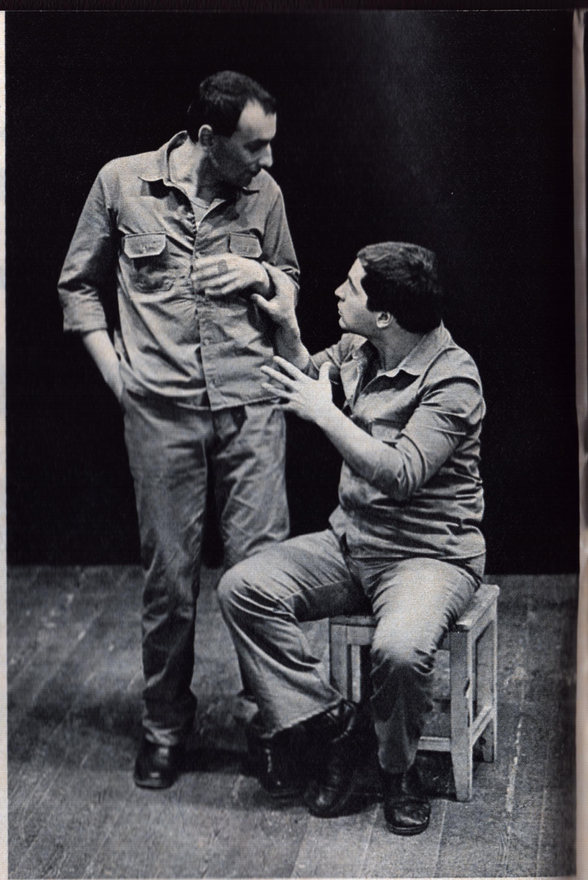
劇は二人の米軍パイロットの運命のからみ合いだけが内容ではなく、きわめて込み入っている。観客の前には、原子爆弾や水素爆弾をつくった者たちや、いろいろな性格をもったパイロットたちが登場してくる。そして、「原爆の父」もやはり自分の発明が意外な目的に使われたことに苦しむが、水爆をつくった当の人物には犯したことにたいする罪悪感などまったくない。この劇のなかにはもうひとりの歴史上の人物が現れる。それはナポレオン（俳優はグラント・トハチャン）で、この役は、大量虐殺を空しく正当化しようとする独裁者を象徴している。

クロードは、自分がとてつもない罪を犯したこと、その罪は許されないことを悟っている。もう人なかでは暮らせないし、暮らしたくもないと考えて、けんかを吹っかけ、ごたごたを起こし、強盗を働くが、どこでなにをやっても、米国の国民的英雄だと分かって、許されてしまう。

劇の幕切れにクロード・アイザリーは観客の方を向いてこう訴える。「皆さん、分かってください、私は新しいヒロシマを望みません。あなたがたのだれもが新しいヒロシマの犠牲者になりかねないのですよ。この私を責めてください。私は二〇万人の人間を殺した人間なのです」



▶稽古を指導する首席演出家アラ・エルンジャキャン（右端）



▶二人の米軍パイロット

劇『ヒロシマ』の原作者ペルチ・ゼイツンツャンは語る。

「『ヒロシマ』は私の長編小説『20世紀の伝説』を下敷きにして書いたものだ。アルメニア民族は歴史上大量虐殺（ジェノサイド）の恐ろしさを再三味わった。第2次世界大戦の炎は全世界を包み、日本人は広島と長崎を体験した。民族の悲劇はどれもみな同じだ。私たちはこうした悲劇のすべてを忘れ去ってはならない。忘れると、新しい爆弾が破裂する可能性があるからだ」

カーメルヌイ劇場の首席演出家アラ・エルンジャキャンは言う。

「私たちの劇場ができてから約3年、座員はだいたい青年だが、レパートリー18本のうち4本が反戦的な芝居であることを指摘しておきたい。モスクワの第12回世界青年学生祭の会期中にいろいろな演劇祭がもよおされるが、私たちはそのときの舞台の上から核の脅威について語りかけるつもりだ。〝演劇は平和と軍縮のための闘いの最も効果的な手段のひとつである〟といったソ連の優れた演出家・演劇理論家コンスタンチン・スタニスラフスキーの言葉を改めて思い起こしたい」



舞台は意欲的な演出と迫真の演技で好評を博した。

ソビエトの歌



つ る

ガムザトフ 原詩
フレンケリ 作曲
ダーク・ダックス 作詞 編曲



つ る

ダーク・ダックス作詩

空を飛ぶつるの 群の中にあなたは
きっといるきっと 私をまっている
はげしい戦いの日も 空に群れて飛ぶ
美しいつるの群 あなたはそこにいる
ルルル……

戦(いくさ)に命すてても 死んではいないあ
なたは
きっといるきっと生きてる この私を
まっている
はげしい戦いの日も 空に群れて飛ぶ
美しいつるの群 あなたはそこにいる

※この歌は1972年にダーク・ダックスによって日本に紹介された。

ЖУРАВЛИ

ラスル・ガムザトフ作詞

Мне кажется порою, что солдаты,
С кровавых не пришедшие полей,
Не в землю эту полегли когда-то,
А превратились в белых журавлей.
Они до сей поры с времен тех дальних
Летят и подают нам голоса.
Не потому ль так часто и печально
Мы замолкаем, глядя в небеса?

（大意） わたしはときどき思う──昔、戦場から戻ってこなかった兵士たちは、異郷で倒れ、白い鶴になったのではないかと。彼らはその遠い時代から今まで飛びつづけ、わたしたちに声を伝えている。わたしたちがよく、悲しげに黙りこみ、空を見上げるのは、そのためではないだろうか。

Летит, летит по небу клин усталый,
Летит в тумане на исходе дня,
И в том строю есть промежуток малый.
Быть может, это место для меня!
Настанет день, и с журавлиной стаей
Я поплыву в такой же сизой мгле,
Из-под небес по-птичьи окликая
Всех вас, кого оставил на земле.

（大意） 疲れた鶴の列が空をゆく。日暮れの霧の中を飛んでゆく。あの列の中の小さな空き場所は、もしかしたら、わたしが入る場所ではないだろうか。やがてその日が来たら、鶴の群とともに同じように青い夕やみの中を飛び立とう。地上に残してきたあなたたちすべての名を、大空から鶴の言葉で呼びながら。

※ガムザトフは1923年生まれの北カフカズ、ダゲスタン自治共和国の人民詩人。

今日のソ連邦

一九八五年8月1日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円（購読料は会費に含まれる）